

長野県埋蔵文化財センター年報13

1996

財団法人

長野県埋蔵文化財センター



茅野市笹原上遺跡全景（北から）



長野市榎田遺跡 1468号住居出土織物（弥生時代中期）

序

発足15年目を迎えた財団法人長野県埋蔵文化財センターは、上信越自動車道や北陸新幹線等の事業の進展に伴って発掘調査が終了し、昨年度来中野事務所を閉所し、本年度から上田・長野の二事務所体制に縮小して事業を推進して参りました。

本年度の発掘調査としては、国道18号線野尻バイパスや北陸新幹線関連のわずかな残件のほか、国営アルプスあづみの公園に関連した穂高古墳群と、蓼科ダムに関連した笹原上第1・第2遺跡の調査を実施しました。発掘調査のほうは新規事業が主体となった1年でした。穂高古墳群は調査の結果古墳ではなく、笹原上第1・第2遺跡は縄文時代の陥し穴ばかりと、あまり注目できる内容ではありませんでしたが、地道な調査のうえに初めて大発見があるものと考えています。

昨年に引き続きウエイトが置かれるようになった整理作業では、長野自動車道関連の長野市石川条里遺跡の一部と同篠ノ井遺跡群の報告書、上信越自動車道関連の更埴市清水製鉄遺跡・大穴遺跡、小布施町玄照寺跡等、中野市がまん淵遺跡・池田端窯跡・清水山窯跡などをまとめた報告書、アルプスあづみの公園関連の穂高古墳群の報告書を刊行致しました。高速道路・新幹線関連のそのほかの遺跡につきましても、平成11年度を目標に報告書を刊行させるべく、作業を進行させて参りました。

普及・公開活動と致しましては、速報展に一工夫加え、整理作業の途中報告的な意味を込めた、企画展「千曲川流域の縄文文化」を開催し、好評を博しました。

本書は平成8年度に当センターが実施した事業の概要をまとめたものです。ご参考となれば望外の喜びです。

日頃より当センターの事業にご協力・ご指導いただいている関係各位にお礼申し上げますとともに、一層のご支援をお願いする次第です。

平成9年3月

財団法人長野県埋蔵文化財センター

理事長 戸田 正 明

目次

口絵写真

茅野市笹原上遺跡全景 (上)

長野市榎田遺跡1468号住居出土織物 (下)

序

目次

| | |
|-------------------------|----|
| I 発掘調査及び整理作業の概要 | |
| 1 概要 | 1 |
| 2 各調査事務所の事業 | |
| (1) 上田調査事務所 | 2 |
| 1 金井城跡 | 4 |
| 2 屋代遺跡群 | 4 |
| 3 笹原上第1・第2遺跡 | 5 |
| 4 宮ノ反A遺跡群ほか | 6 |
| 5 郷土遺跡ほか | 7 |
| 6 中原遺跡・中田遺跡ほか | 9 |
| 7 東平古墳群 ・観音平経塚ほか | 10 |
| 8 清水製鉄遺跡・大穴遺跡 | 11 |
| 9 屋代遺跡群・更埴条里遺跡 | 12 |
| 10 金井城跡・砂原遺跡ほか | 15 |
| 11 国分寺周辺遺跡群 ・弥勒堂遺跡ほか | 16 |
| 12 更埴条里遺跡・屋代遺跡群 | 17 |
| 13 篠ノ井遺跡群 ・築地遺跡ほか | 18 |
| 14 浅川扇状地遺跡群 ・三才遺跡 | 19 |
| (2) 長野調査事務所 | 20 |
| 1 貫ノ木遺跡 | 22 |
| 2 穂高古墳群 | 22 |
| 3 山の神遺跡 | 22 |
| 4 石川条里遺跡 | 23 |
| 5 篠ノ井遺跡群 | 23 |
| 6 松原遺跡 | 24 |
| 7 榎田遺跡 | 27 |
| 8 清水山窯跡 ・池田端窯跡ほか | 29 |
| 9 牛出遺跡・風呂屋遺跡ほか | 29 |
| 10 日向林B遺跡 ・貫ノ木遺跡ほか | 31 |
| II 普及・公開活動の概要 | |
| 1 企画展 | 33 |
| 2 指導・研究会・学習会 | 34 |
| 3 刊行物 | 34 |
| III 機構・事業の概要 | |
| 1 機構 | 35 |
| 2 事業 | 36 |

平成8年度役員及び職員

I 発掘調査及び整理作業の概要

1 概要

平成8年度の発掘調査は、前年度に引き続き北陸新幹線関連・国道バイパス関連・国営公園関連に加えて長野県土木部のダム建設関連の遺跡を対象に実施した。整理作業は長野自動車道関連・上信越自動車道関連・北陸新幹線関連・国道バイパス関連・国営公園関連遺跡を対象とした。詳細は各事務所毎に報告するとして、概要を以下の一覧表に示す。

(1) 発掘調査

北陸新幹線関連

| 所在地 | 遺跡名 | 調査対象面積 ㎡ | 契約面積 ㎡ | 調査面 積 | 調査延面積 ㎡ | 調査期間 | 調査員数 | 調査状況 | 主な検出遺構 | 主な出土遺物 | 次年度以降調査面積 ㎡ | 担当事務所 |
|-----|-----|-------------|-----------|----------|------------|-------------------|------|------|------------------|--------------|----------------|-------|
| 佐久市 | 金井城 | 237 | 237 | 1 | 237 | 8・10・14 ～10・18 | 2 | 終了 | 土塁1、溝1、 | 須恵器、内耳土器 | 0 | 上田 |
| 更埴市 | 屋代 | 90 | 90 | 1 | 90 | 8・4・18 ～4・26 | 2 | 終了 | 竪穴住居3、溝3、炭化物集中1、 | 土師器、須恵器、石製品、 | 0 | 上田 |

建設省国道18号バイパス関連

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-------|-----|---|-----|----------------|---|----|-----------------|-------------------|---|----|
| 信濃町 | 貫ノ木 | 7,600 | 200 | 2 | 400 | 8・6・5 ～7・12 | 2 | 終了 | 旧石器時代石器集中1、陥穴1、 | 後期旧石器時代石器 縄文土器 | 0 | 長野 |
|-----|-----|-------|-----|---|-----|----------------|---|----|-----------------|-------------------|---|----|

国営アルプスあづみの公園関連

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|------|--------|-------|---|-------|------------|---|----|---------|-----------|----|----|
| 穂高町 | 穂高古墳 | 1,000 | 1,000 | 1 | 1,000 | 10・1～10・24 | 2 | 終了 | 近世集石遺構1 | 縄文土器、近世陶器 | 0 | 長野 |
| 大町市 | 山ノ神 | 35,950 | 450 | 1 | 450 | 10・29～11・7 | 2 | 継続 | 縄文時代包含層 | 縄文土器、フレイク | 未定 | 長野 |

長野県土木部蓼科ダム関連

| | | | | | | | | | | | | |
|-----|----------|--------|--------|---|--------|------------------|---|----|-----------|----------|-----|----|
| 茅野市 | 笹原上第1・第2 | 38,100 | 37,500 | 1 | 37,500 | 8・8・19 ～10・31 | 2 | 継続 | 陥穴87、土坑1、 | 縄文土器、石器、 | 600 | 上田 |
|-----|----------|--------|--------|---|--------|------------------|---|----|-----------|----------|-----|----|

(2) 整理作業

| 事業別 | 所在地 | 遺跡名 | 作業内容 | 事務所 |
|---------|---|--|------------|-----|
| 長野自動車道 | 長野市 | 石川条里・篠ノ井 | 図版作成・報告書刊行 | 長野 |
| 上信越自動車道 | 佐久市・小諸市・東部町 上田市・坂城町・更埴市 | 栗毛坂・三田原・郷土・真行寺・大日ノ木・宮平 東平古墳・小山製鉄・更埴条里・屋代ほか | 接合・実測・図版作成 | 上田 |
| | 更埴市 | 清水製鉄・大穴 | 報告書刊行 | 上田 |
| | 長野市・中野市 豊田村・信濃町 | 松原・榎田・牛出・対面所・風呂屋 日向林B・東裏・貫ノ木・星光山荘ほか | 接合・実測・図版作成 | 長野 |
| | 小布施町・中野市 | 飯田古屋敷・池田端窯跡ほか | 図版作成・報告書刊行 | 長野 |
| 北陸新幹線 | 軽井沢町・御代田町 佐久市・浅科村・上田市 坂城町・更埴市・長野市 | 県・金井城跡・長土呂・前田・砂原・中平田中島 園分寺周辺・弥勒堂・風呂川古墳・開畝 更埴条里・屋代・篠ノ井・築地・浅川扇状地ほか | 接合・実測・図版作成 | 上田 |
| 国道バイパス | 信濃町 | 貫ノ木・西岡A | 実測・図版作成 | 長野 |
| 国営公園 | 穂高町 | 穂高古墳群 | 図版作成・報告書刊行 | 長野 |

2 各調査事務所の事業

(1)上田調査事務所

発掘調査

調査遺跡数：4遺跡（北陸新幹線関連2遺跡、県営蓼科ダム関連2遺跡）

調査面積：北陸新幹線関連 佐久市金井城遺跡（237m²）、更埴市屋代遺跡群（90m²）

県営蓼科ダム関連 茅野市笹原上第1遺跡（13,500m²）、同第2遺跡（24,150m²）

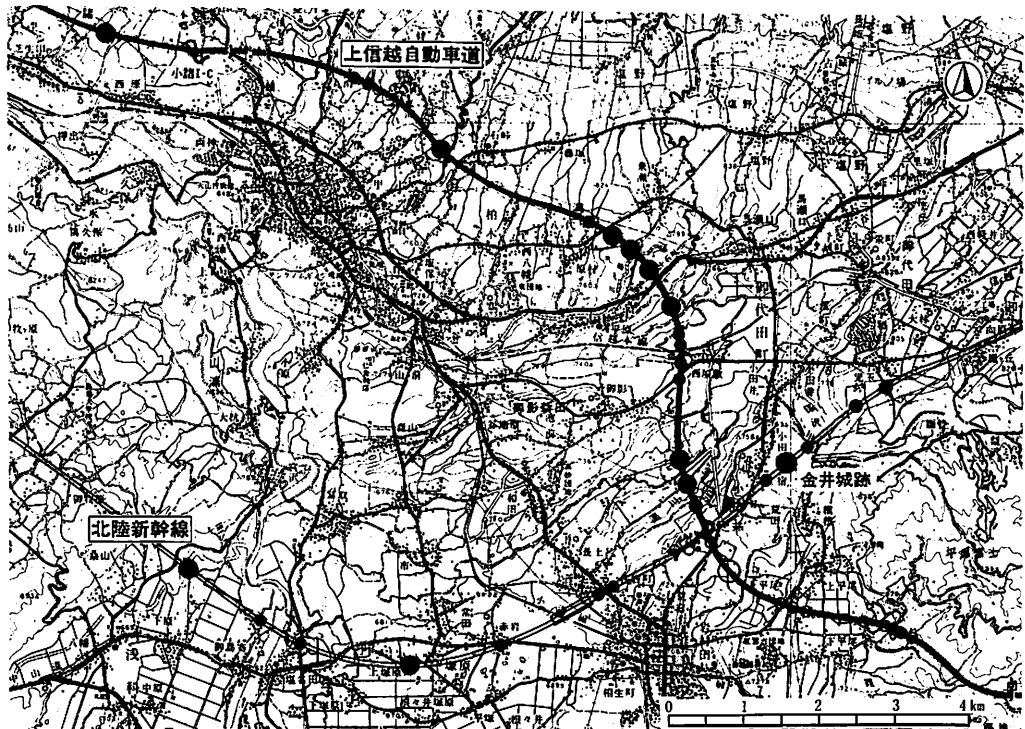
北陸新幹線関連の2遺跡は、緊急工事や道路復旧工事に伴うもので調査面積も僅かだが、今までの調査結果を追認した。蓼科ダム関連は今年度新たに着手した事業で、標高1,200mを超える北八ヶ岳連峰の山麓尾根部より90基程の陥し穴群が検出された。縄文時代の狩猟活動を考える上で良好な資料となろう。

整理作業

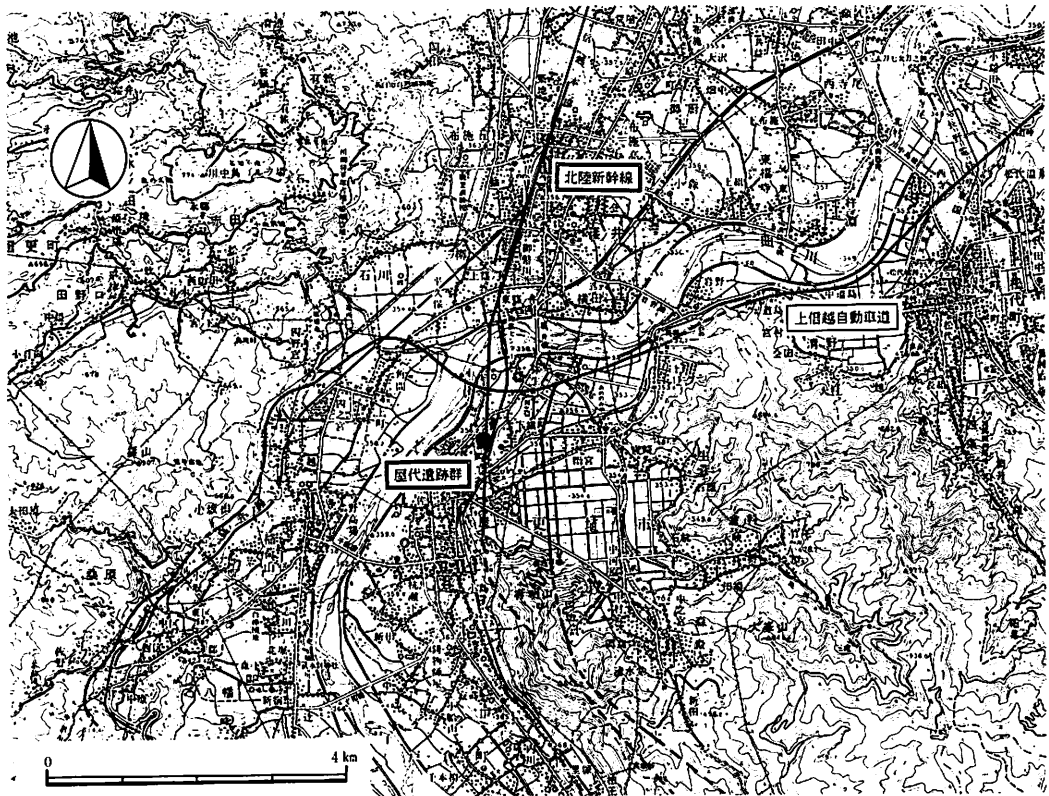
上信越自動車道関連7冊、北陸新幹線関連5冊の報告書刊行にむけての整理作業を継続して進めた。この内、更埴市清水製鉄遺跡・大穴遺跡については『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22 更埴市内1』として刊行した。

高速道路関連の各遺跡は遺物の実測作業を本格化した。膨大な遺構・遺物を抱える屋代遺跡群も、弥生・古墳編、古代編を中心に行い、縄文時代の遺物整理にも着手した。

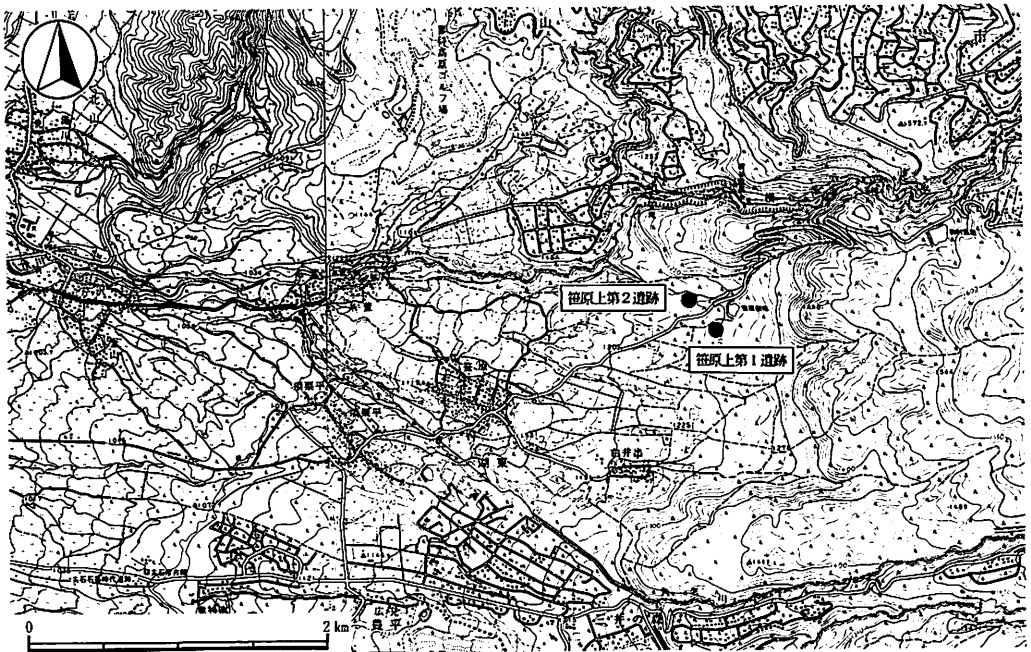
新幹線関連は、平成9年度報告書刊行を目指し、遺物の接合・実測を中心に作業を進め、遺構に関しても検討を加えた。



地図1 上田調査事務所関係調査遺跡(1) (1:100,000)



地図 2 上田調査事務所関係調査遺跡(2) (1:100,000)



地図 3 上田調査事務所関係調査遺跡(3) (1:50,000)

1 金井城跡（北陸新幹線関連）

所在地：佐久市大字小田井南金井1077-12・13

調査担当者：白田武正・河西克造

調査期間：平成8年10月14日～10月18日

調査面積：237㎡

遺跡の立地：浅間山南麓末端の台地部

時代と時期：中世（16世紀）

遺跡の特徴：戦国期の城館

主な検出遺構：土塁1、溝状遺構（土塁関連）1

主な出土遺物：須恵器（平安）、内耳土器



第1図 二郭の土塁断面

金井城跡については、すでに小田井工業団地造成事業に伴う大規模な調査（佐久市教育委員会）と北陸新幹線建設に伴う調査（当センター）があり、今回は、新幹線用地の擁壁のクラック修繕工事に伴い、主郭の北方に位置する用地沿いを調査した。

狭い範囲の調査であったが、その結果、二郭と浅谷を画する堀及び二郭で溝状遺構が検出され、土層断面では下端幅約5mの規模の土塁が確認された。この溝状遺構は、堀と約5mの間隔で並走し、既存の調査で土塁関連遺構と称されていた遺構である。土塁が平面的に確認できなかったため、残念ながら両者の位置関係・新旧関係を把握することはできなかった。

金井城は主郭を中心に扇状に配置された堀が特徴であるが、今回の調査で、堀の内部には土塁が存在したことが判明し、郭輪内の空間構成を考える上で貴重な資料を得ることができた。

2 屋代遺跡群（北陸新幹線関連）

所在地：更埴市大字屋代字一丁田

調査担当者：百瀬長秀・藤森俊彦

調査期間：平成8年4月18日～4月26日

調査面積：90㎡

遺跡の立地：千曲川右岸の自然堤防上

時代と時期：古墳時代後期

遺跡の特徴：古墳時代の居住域

主な検出遺構：竪穴住居跡3・溝跡3・炭化物集中1

主な出土遺物：土師器・須恵器・石製品



第2図 カマド土器出土状況

屋代遺跡群7区として調査した本地区は、平成3年度に当センターで調査を行った一丁田遺跡に隣接し、実質的にはその一部になる。また、南に続く地区は更埴市が調査している。

今回は、道路部分ということで非常に狭い範囲の調査となったが、東西にのびる溝、6～7世紀の竪穴住居跡の一部、カメをかけたままの状態で見捨てられたカマド等を検出した。遺物はカマド周辺でまとまって出土したものの、全体的に少なかった。中世に比定される遺構は検出できなかったものの、前回の一丁田遺跡の成果を追認することができた。

3 笹原上第1・第2遺跡（県営蓼科ダム関連）

所在地：茅野市豊平東嶽4732・4734

調査担当者：宇賀神誠司・桜井秀雄

調査期間：平成8年8月19日～10月31日

調査面積：37,500㎡（第1遺跡 13,350㎡、第2遺跡 24,150㎡）

遺跡の立地：八ヶ岳連峰中山の山麓

遺跡の特徴：縄文時代の陥し穴群

主な検出遺構：土坑88基（第1遺跡 32基、第2遺跡 56基）

主な出土遺物：縄文土器、石器（石鏃、凹石）

北八ヶ岳連峰は標高2,200～2,300m程の山々が連なり、その山麓には広大な台地が形成され尖石遺跡をはじめとする縄文時代の大規模集落が多数立地している。本遺跡は中山(2,496m)の裾野にあり、山腹急斜面から山麓緩斜面への変換点にあたり、標高1,200～1,250mを測る。

ダム建設予定地は、本来平坦な台地状の地形であったと思われるが、河川の浸食などにより削られ、現状は幾筋かの瘠せ尾根が平行する状況になっている。

第1遺跡は、比較的平坦で幅広な台地状の尾根に立地し、北側は小河川の段丘崖により区画される。この崖線に沿った長さ360m、幅60m程が調査範囲である。

検出された土坑は32基で、すべて陥し穴土坑と考えられる。土坑の分布は散漫であるが、数基が隣接して構築される傾向がうかがえそうである。土坑長軸が等高線に直交する（尾根筋に平行）ものが多い。

第2遺跡は、長さ450m、幅20～50m程の瘠せ尾根上に形成される。尾根は山側より徐々に幅を広げ、途中で二又に分岐する逆Y字状をなす。

調査された土坑は56基で、1基を除き陥し穴土坑と呼ばれるものである。土坑は尾根の頂部で尾根筋に平行するように構築されるものが多く、尾根の幅が広がる部分では尾根に直交（等高線に平行）するものもある。分布は第1遺跡と同様に散漫だが、10基の土坑が尾根軸に直交するようにまとまる部分もある。陥し穴土坑ではない土坑は直径1.4m程の円形で、炭化物や焼土粒を含む覆土中より無文土器（縄文時代後期か）の大形土器片が出土し、土坑底部にも炭化物のブロックが認められる。

両遺跡で検出された陥し穴土坑の形態は上面形が長楕円形（隅が丸まる長方形を含む）で底面形が方形を呈し、底部施設として小ピットを有するものが圧倒的に多く、これは更にいくつかのタイプに分類できそうである。土坑の深さは50cm程から1.5mを超えるものまでである。

この土坑の特徴として、土坑長辺に沿ったロームブロックの貼りつけがある。従来は壁の崩落などと考えられていたが、断面観察でも自然堆積のレンズ状交互堆積でなく、底面から垂直に立ち上がるブロックとして認識できることからブロックの貼りつけと考えられる。

他には、円形の陥し穴土坑があるが検出例は少なく、底部施設を持たず浅い傾向がある。

両遺跡の陥し穴土坑は、遺跡単位としてまとまったものであり、今後の整理作業で詳細な検討を加えていきたい。

4 宮ノ反A遺跡群ほか(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書17・整理作業)

担 当 者：宇賀神誠司

佐久インターチェンジ以北の対象遺跡の内、佐久市・小諸市境付近に分布する9遺跡を一括整理している。地理的には佐久盆地平野部の北端に位置する遺跡群の整理であり、古墳時代後期後半から平安時代の集落跡が中心となっている。これから北は浅間火山帯の裾野地形となって縄文時代の遺跡が密集するようになる。

発掘調査は平成2年度から5年度にかけて断続的に行い、平成7年度から本格的な整理作業に着手している。昨年度は、諸記録の基礎整理、および遺物の接合から実測までの遺物整理を進め、記録類については完了、遺物については石・鉄製品の類を除いて実測作業までが終了した。

本年度は、遺物整理を中心にして作業を進めた。実測・トレース・写真撮影が終了し、版下に使用する個々の遺物図版はほぼ出揃ったことになる。遺構図のトレース作業にも一部取り組んだが、整理担当者が急遽発掘作業に対応せざるを得ない事態となり、所期の目的を達成することができなかった。

遺構や遺跡全体の分析については手つかずの状態だが、遺物整理が一応の完了をみたことで遺物面からの検討が可能なお状態になった。まだ模索的な段階ながらも、いくつかの見聞が得られている。ここでは、方形に巡らされた区画溝を伴う掘立柱建物跡群が発見されたことで話題となった、宮ノ反A遺跡群（年報10所収）に限り触れておきたい。

区画溝については、かつて古墳時代末～奈良時代初頭として時期を限定した。現時点では、掘削時期を7世紀末に求めながらも、区画範囲の拡張事業を経て、8世紀前半まで機能していた公算が大きいと考えている。また方形区画内（溝A-C間）に示した竪穴住居跡についてはいずれも溝の掘削時期よりも古い年代が与えられるものであり、したがって区画内に竪穴住居跡は存在していなかったという判断に至った。代わりに、中世居館に属するものと誤認していた総柱式の掘立柱建物跡群を北端部に追加したいと考えている。

区画溝を伴う施設については、残念ながら遺物面からその機能を類推することができなかった。少なくとも官衙的施設の可能性を指摘できるようなものは何ひとつ出土していない。安易に「居館」として報告した点は、ひとまず修正が必要であろう。

集落自体は、調査区北端部において、いち早く6世紀末～7世紀初頭の段階に成立している。いわゆる律令期集落としては、その初源期に相当することから、何らかの要件を満たす好適地であったのだろう。集落規模は徐々に膨らみ、総体としては7世紀代の遺構が他を圧倒する内容となっている。こうした点は、関係各市町による周辺の調査地点には認められず、初期段階の中核域であったと考えられる。また、7世紀代の竪穴住居跡には、畿内地方からの搬入土器が多数残されており、活発な交流があったことを物語っている。これらを排除して区画溝が掘削されることになるのだが、ここを要衝と見做す素地が早くから出来上がっていたということだろう。

5 郷土遺跡ほか（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書19・整理作業）

担当者：桜井秀雄

小諸市内に分布する、三田原遺跡群・岩下遺跡・石神遺跡・郷土遺跡・東丸山遺跡・西丸山遺跡・深沢遺跡の7遺跡の整理作業にあたっている。地形的には、いずれも浅間火山の南裾部に位置しており、縄文時代の遺跡がその中心を占めている。発掘調査は平成3年度から7年度にかけて行われ、平成7年度から本格的な整理作業に入っている。

ここでは、主に郷土遺跡の整理作業状況について述べておく。郷土遺跡は小諸市の浅間火山の南裾野の緩傾斜面上（標高約830m）に位置し、平成4年度から7年度までの4ケ年にわたり発掘調査を行った。発掘調査面積は8280㎡であった。検出された遺構数・遺物量は相当数のほり、遺物に関しては発掘調査の段階で、テンバコにして900箱を越える量が出土した。

整理作業は平成7年度から本格的に開始しており、昨年度の整理作業において土器の接合・復元、基礎図面整理、石器台帳登録作業がほぼ終了し、今年度は土器及び石器等の遺物の実測作業を中心として、遺構図のトレース作業および写真撮影も一部行った。以下、遺構と遺物の2項に分けて、現段階での所見をまとめてみたい。

遺 構：遺構については、竪穴住居跡が約120軒、土坑約1000基、屋外埋甕10基、古墳1基などが確認されている。住居跡は、最終的な確定ではないが現段階では、縄文時代前期初頭のもの4軒、中期中葉から後期初頭にかけたものが約114軒、平安時代のもので2軒とそれぞれ比定できうと考えている。

縄文時代前期初頭期の住居跡はいわゆる塚田式と呼ばれる時期のものである。その後、中期中葉に至るまで遺構は確認されていない。縄文時代中期中葉期から後葉期にかけて郷土遺跡は最盛期を迎える。とりわけ中期後葉の加曾利E式期においては、加曾利EⅠ～Ⅳ式期まで途切れることなく集落は続いていくことが理解できる。なかでもEⅠ・EⅡ式期の資料が豊富であり、当該期の研究においても良好な資料となりうるものと期待できる。そして、後期初頭期をもって郷土遺跡からは住居跡が認められなくなる。後期以降の土器片も僅少であることからこの時期をもって集落は終焉を迎えたようである。

ところで湮滅古墳は、『小諸市誌 考古篇』には5基からなる郷土古墳群の存在が認められているため、調査段階から郷土古墳群のうちの1基であろうとの認識はしていた。また『小諸市遺跡詳細分布調査報告書』にはそのうちの1号墳と2号墳が記載されている。したがって調査した古墳が、郷土古墳群のなかの何号墳に比定されるかは整理作業での検討課題であった。そこで今年度は、小諸市教育委員会と共にその比定作業を行い、その結果、郷土古墳群のうちの2号墳に比定できるとの見解を見出すことができた。したがって今後は郷土2号墳として報告していく。本古墳からは、8世紀代に比定できる須恵器と人骨1体分（現在鑑定中）が出土している。

平安時代の住居跡2軒は、9世紀後半から10世紀前半頃に比定できるだろう。

約1000基にのぼる土坑は、いくつかのグループに分類できると思われる。このう

ち調査段階では墓坑と認識したものが相当数あったが、整理作業を進めていくなかで、墓坑と考えられるケースは意外と少ないことが判明しつつある。その一方、貯蔵穴と考えられる土坑の存在が予想以上に多く認められてきている。

また、調査区の北西から南東方向に向かって流れる大きな自然流路が認められている。この自然流路については、調査段階では縄文時代中期後葉に形成されたと理解していたが、出土土器を検討した結果、古代以降に形成されたことが判明したため、ここに訂正しておく。

遺物：前述の通り、調査段階ではテンバコ900箱の遺物が出土した。このうち土器については復元できたものは300個体を越えている。その大部分が縄文時代中期後葉のものであり、加曽利E式土器、曾利式土器、唐草文系土器の3者いずれもが認められている。他に東北地方の影響を受けた土器なども少量ながらみられている。

石器については、台帳登録がおおむね終了している。主な石器の内訳は、石鏃が約490点、石匙が約20点、石錐が約20点、スクレイパー類が約50点、打製石斧が約4000点、磨製石斧が約100点、磨石類が約1100点、石皿が約70点、石棒が約50点、多孔石が約70点、丸石が約20点、軽石製品が約180点などとなっている。打製石斧の割合が極めて高く、それに続いて磨石類の出土が目立っている。なお、現在すべての石器について、その石材鑑定を進めている。

また、石器でひときわ目を引くのは、軽石製品の多量出土である。郷土遺跡の周辺地域では地山のローム層に軽石が多量に含まれており、採取が容易であったことにもよるのだろうが、その出土量には目を見張る。またその形状もさまざまなものがある。竪穴住居跡の出入口部に置かれた鉢状の軽石製品は、埋甕と同じ機能・用途を担ったものと考えられるが、他にも多孔石状のものや石皿状のもの、定角式磨製石斧状のもの、ペンダント状のもの、などかなりのバラエティーに富んでいる。軽石という実用品として不向きな石材を用いていることもあり、その機能・用途に関しては、今後十分に検討していく必要がある。

最後に、土製品について触れておきたい。土偶は約60点の出土をみており、いわゆる土偶を多量に保有する遺跡のひとつとして理解できるだろう。なかでも注目したいのは、焼町土器の文様をもつ土偶の存在である(第3図)。また、三角柱状土製品は年報11でも紹介したように101号住居跡から完形品が1点出土しているが、整理作業において破片ではあるがさらにもう1点が確認され、2点の出土となった。



第3図 郷土遺跡出土土偶

6 中原遺跡・中田遺跡ほか（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書20・整理作業）

担当者：川崎 保

東部町の遺跡群は千曲川右岸の烏帽子岳西南麓の複合扇状地上に立地し、上信越自動車道建設に伴い平成4年から7年まで発掘調査を実施した。整理作業は平成8年度から始まり、土器の接合・補強、遺物の分類・登録・実測、遺構図の修正などを主に行った。

遺物を分類している段階でわかってきたことを中心に時代順に簡単に触れたい。

縄文時代早期は、森下遺跡の表裏縄文や撚糸文土器をはじめ、各遺跡で押型文土器も散見される。前期は、真行寺遺跡の花積下層式期住居が最も古く、中葉は関山式の段階で中原遺跡などで集落としてまとまりを見せ、細田遺跡では有尾式の住居がある。後葉では中原・森下・山の越・真行寺遺跡で比較的まとまった諸磯b・c式の資料がある。

中期は、五領ヶ台式期の資料が中原・山の越遺跡、中葉は山の越・森下・細田遺跡、後葉では中原・森下・細田遺跡などで散見される。後期は、中原遺跡で低湿地の土器集中区に伴って貯蔵穴群（称名寺式～堀ノ内式）、中原・山の越遺跡で尾根の斜面から称名寺式期の土坑（墓穴？）群が見られる。釜村田遺跡の敷石住居跡は堀ノ内1式の古い段階の良好な一括資料である。堀ノ内式期以降の資料は極めて少なく、晩期も資料は少ない。森下遺跡で晩期前半の土器や土偶の脚が、中原遺跡で水Ⅰ式に後続すると考えられる資料が多少まとまっている。中原遺跡の土坑から出土した鯨面土偶も当該期のものである。

石器は、中原遺跡で約1万点の石器が出土している。小形の剥片石器は黒曜石・チャート、打製石斧・スクレイパーは泥岩などの堆積岩が多い。いずれも烏帽子岳西南麓には少ない石材である。凹石・磨石・台石・石鉢・五輪塔などは安山岩、砥石は凝灰岩と遺跡周辺で多くみられる石材を多用しているようである。

弥生時代は、後期の竪穴住居跡が中原遺跡などで見られるが全体的に量は多くない。

古墳時代や古代の資料も各遺跡に散在している。山の越・細田・真行寺遺跡では古墳時代前期から中期にかけての竪穴住居跡に伴って良好な一括資料が得られている。

中世の遺物は青・白磁のほか珠洲、瀬戸、常滑、美濃系の陶器があり、在地系の土師質の播鉢、皿、甕、内耳土器も見られる。遺構については中田・桜畑遺跡に鍛冶関係の遺構があり、山の越・桜畑遺跡などの竪穴建物跡や墓墳で陶磁器や銅銭が伴出している。

科学分析関係は主に委託しているが、中原・山の越・真行寺遺跡の縄文時代前期～後期および森下遺跡の古代の土坑について、リン・カルシウム分析を行った。森下遺跡例では墓墳底部から高い値のリン酸が検出されたという結果が出てきている。

山の越・細田遺跡の古墳時代、真行寺遺跡の平安時代の竪穴住居跡の炭化建築材及び中田遺跡の平安時代の燃料材と考えられる炭化材の樹種同定の結果では、真行寺遺跡例のクリ材を除けばいずれもクヌギが卓越しており、上田市宮平遺跡や御代田町の例とも整合している。建築材にしる燃料材にしる人為的な選択が入るのであるが、遺跡周辺にクヌギ、コナラ、クリなどの二次林がはえていたことが推測される。

7 東平古墳群・観音平経塚ほか(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書21・整理作業)

担当者：若林 卓

上田市内・坂城町内の調査は、平成4～7年度にかけて実施された。本格的な整理作業は、平成7年度に始まり、土器の接合・復元、遺物の分類・実測、遺構図の修正・トレースといった作業を中心に行った。また、自然科学的分析や、脆弱遺物の保存処理も併せて行っている。

対象となる遺跡とその主な遺構・遺物は以下の通りである。詳細は『年報』9～12を参照。

大日ノ木遺跡・・・縄文時代の石器・晩期土器、古墳時代前期および古代の集落。

七ツ塚古墳群・・・遺構・遺物を認めず。

染谷台条里遺跡・・・水田層、平安時代および中世の土器片若干。

陣馬塚古墳・・・古墳時代後期（7世紀前葉）の横穴式石室墳1基。

宮平遺跡・・・古代（7世紀～9世紀）の集落。中世の土壙墓。

上原古墳群・・・平安時代（9世紀後半～10世紀前半）の山間の小集落。古墳なし。

山崎遺跡・・・平安時代（10世紀前半）の竪穴住居。

山崎古墳群・・・遺構は確認されなかった。土器片若干。

山崎北遺跡・・・後期古墳1基。平安時代（10～11世紀前半）の小集落。中世の土壙墓。

東平古墳群・・・古墳時代中期（5世紀）の小形の方墳1基と円墳2基。

土井ノ入窯跡・・・炭焼窯2基。須恵器・瓦窯は確認されず。

観音平経塚・・・中世墓地および経塚。五輪塔、多字一石経石多数。

小山製鉄遺跡・・・平安時代（9世紀末～10世紀前半）の鍛冶集落。

上田市内・坂城町内においては高速道は山地から山麓部にかけてを通過する。そうした立地上の理由からか、大規模な集落遺跡はなく、古墳、古代の鍛冶関連遺構・遺物、中世の墓域および経塚といった内容が特徴的である。

東平古墳群は方墳の2号墳と、円墳の1号墳および3号墳（砥沢古墳）から成る。現段階では2号、1号、3号の順に築造されたと考えているが、2号と1号の時間的隔たりはかなり短い可能性が高い。2号墳に伴う壺・高坏・小形丸底土器などの土師器は、千野浩氏の本村東沖遺跡第三段階や、駒沢新町段階に相当するものであろう。埴輪は壺形埴輪と円筒埴輪が出土している。黒斑を有し、赤色塗彩が施されている。円筒埴輪は器高30cm以下の小形で、ハケ調整を施していない。突帯の断面形は三角形を呈し、透かしは認められない。

鍛冶に関連する遺物は、宮平・上原遺跡などほとんどの集落で検出されている。いずれの遺跡も製錬業を行った様相が認められない。小山製鉄遺跡では住居、屋外鍛冶炉、排滓場、炭焼成坑がセットで検出され、一定期間の専門的な操業が窺えるものの、やはり製錬は行っておらず、外から持ち込んだ鉄素材を精錬・鍛錬する鍛冶業を行う集落であったと考えられる。

中世墓については、観音平経塚が、火葬墓と密接に関連して礫石経を埋納した例として注目される。教典のほとんどは法華経であり、複数人が書写作業を行い、うち幾人かは各々が法華経全部を写した可能性が高い。納経に際しての書写行為の実態が示された一例である。

8 清水製鉄遺跡・大穴遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22・整理作業）

担当者：上田 真・伊藤友久

平成4・5年度に発掘調査され、昨年度整理作業から原稿執筆までを行った清水製鉄・大穴両遺跡の発掘調査報告書が、本年度刊行となった。

清水製鉄遺跡 更埴市大字森字清水ほか地籍の谷間に位置し、鉄滓などの表面散布により製鉄遺跡として知られていたが、詳細は明らかでなかった。今回、初めて発掘調査され、斜面を造成した平坦面や工房址中に築かれた製錬炉13基、精錬鍛冶炉6基、鍛錬鍛冶炉4基などが発見されて、製錬から鍛錬鍛冶までの一貫した製鉄作業が明らかとなった。

平坦面や工房址および工人の食事を賄ったと思われる竈屋などの出土土器から、操業時期は10世紀前葉から11世紀前葉と推定される。近辺で検出された炭窯からは、これに先行し同時期にも操業していた製炭作業も明らかとなった。

検出された製錬炉は円筒自立炉で、東北や北関東地方および伊豆半島に類例が見られ、近年長野市松原遺跡でも検出され、今後その系譜をめぐって研究が進むものと期待される。また、全量採取された鉄滓や、発掘調査に平行して進められた埋土の水洗で採取された砂鉄等の分析により、製鉄原料が砂鉄であり、製錬炉1基当たり約230kgの砂鉄を用いて約43kgの鉄を生産していたことなどが推定された。

このほか、今回の調査で検出された終末期古墳の1号墳からは7世紀後葉から8世紀初頭の土器が出土しているが、特に追葬や墓前祭祀に伴う時期差とは考えられず、大穴遺跡検出の古墳群とともに、8世紀に下る終末期古墳の様相の一端が明らかになった。

大穴遺跡 更埴市大字森字大穴地籍の東部（河東）山地最西端の有明山系下の崖錐緩斜面に位置し、古墳時代から平安時代の集落址とされていたが、本調査により弥生時代中期・平安時代の集落址と古墳時代終末期の古墳群の複合遺跡であることが明らかになった。このほかに縄文時代早・前・中・後期の土器も出土しているが、これらに伴う遺構は検出されていない。

集落は、最初弥生時代中期に営まれ、空白期を挟んで平安時代に再び営まれている。これらの集落の成立には眼下に広がる後背湿地（更埴条里遺跡）との係わりがあると見られる。

古墳群築造前後の1号溝址やそれ以前の14号溝址では、祭祀的構成の土器群が出土し、1号溝址と重複関係を持つ7・8・9号集石址の石積の配列や馬骨の埋葬にも祭祀的な場の意識があったようである。

古墳時代終末期の古墳群は、無袖型あるいは片袖型横穴式石室と推定される1号墳と両袖型横穴式石室の2～6号墳に分類され、石室全長が9mを越える大型横穴式石室の1号墳の築造が8世紀以前なのに対して、2～6号墳は出土須恵器坏・蓋の年代から8世紀代に相次いで築造されたと思われる。

石室内から出土した人骨の分析鑑定では、4体分が出土した5号墳に追葬が認められるが、1体分のみの3・4・6号墳では追葬の有無が確認できなかった。出土人骨は、古墳により焼骨と生骨に分かれている。

9 屋代遺跡群・更埴条里遺跡(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書25・26 整理作業)

担当者：寺内隆夫、平出潤一郎、鳥羽英継、宮島義和、相沢秀樹、河西克造、水沢教子

両遺跡は、善光寺平（長野盆地）南部に位置し、千曲川右岸の旧河道・自然堤防上・後背低地にわたる。この間を南北に縦断する形で全長約2.3kmの範囲を調査した。調査期間は平成3年から6年の4年間で、平成7年度から本格的な整理作業を開始した。報告書の作成は、遺跡別・地区別とはせずに両遺跡を一括した上で、時代別・層位別の分冊方式をとり、最終年度に『総論編』を加える方針を立てた。これは全長2.3km間におよぶ範囲の景観（自然環境と人の営みの関係）を、時代ごとに見ていこうとする意図による。また昨年度、『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書23・長野県屋代遺跡群出土木簡』を刊行している。

本年度の整理は、平成9年度刊行予定の『弥生・古墳時代編』、平成10年度刊行予定の『古代編』の2冊に関わる整理を中心に進めた。整理担当者の分担は以下の通りである。①骨・骨角器の処理＝相沢秀樹 ②鉄製品・鍛冶関係資料、植物種実の選別・分類、遺物水洗など＝平出潤一郎 ③古墳から古代土器の土器分類・実測ほか＝鳥羽英継 ④木製品・木屑の分類・実測ほか＝宮島義和 ⑤遺構図の編集、板状木製品からの木簡検出など＝水沢教子 ⑥水田遺構すべてと更埴条里遺跡全般＝河西克造 ⑦整理計画・屋代遺跡群全般＝寺内隆夫

環境復元と人間活動の関係：屋代遺跡群・更埴条里遺跡では、(1)沖積地を約2.3kmにわたって調査したことにより、山地直下の低湿地から後背低地、自然堤防上、千曲川の旧河道などの異なった地形に残された遺構を連続的にとらえることができたこと。(2)地表下8mまでの間に縄文時代前期から近世にかけての遺構が層位別に検出されており、各時代毎の特徴とその変化をとらえやすいこと。これらの点から、今回の報告書では各々の時代の「景観」を復元することに目標を設定した。ただし、自然環境復元のための資料・考古資料ともに、必ずしも全時代を通して良好な資料が整っているわけではなく、若干の偏りは否めない。現段階では、屋代遺跡群⑥区の旧河道跡から多量に出土した自然木、種実、昆虫、動物遺体などの分析を中心に、5世紀から9世紀にかけての自然環境復元のための作業を進めている。

統一的な意図を持ってサンプル採取には努めたものの、調査年次と担当者が異なり、また、各地区の調査期間が限られていたため、サンプリングについては、その都度その時点で気づいたものの“集合”といった傾向にある。報告書作成にあたっては、こうしたサンプルを活かしてゆく方法を模索するため、“環境復元のための検討会”を設置した。検討会のメンバーは国立歴史民俗博物館の辻誠一郎助教授を中心に、微化石分析等を委託しているパリオサーヴェイ株式会社の辻本崇夫氏、古環境研究所の松田隆二氏、それに担当班の調査研究員である。

今年度は、現在までの分析結果の整理、残存している土壌サンプルの確認、基本土層の確認などを行い、今後の作業の進め方について検討を行った。その中で、基本方針として、従来の報告書に散見される考古資料分析と隔離された形での「付編 自然科学分析」方式とはせず、環境復元と人間活動の関係を総合的にとらえてゆくことを確認した。平成11年刊行予定の『総論編』は、こうした観点から編集することとなった。

環境復元のための作業は、特に屋代遺跡群⑥区から出土した古代の木製品の樹種同定と土壌サンプルからの植物種実の検出が先行している。ここでは、植物種実の検出・同定について、その作業手順と成果について触れておくこととする。

種実の採取・同定：低湿地遺跡では、発掘時に肉眼で採取可能な植物遺体（木の根・幹・枝・葉、堅果類や穀類の種実の一部）のほかにも、多量の種実が残存している場合が多い。これらの種実は、人が利用した植物を明らかにするだけでなく、周辺環境を復元する上で重要となる。種実は土壌サンプルをフルイで水洗選別するだけで、比較的簡単に採取が可能であり、低倍率の実体顕微鏡があれば、短期間のトレーニングで種実を拾い出し、簡単な分類までできるようになる。屋代遺跡群では辻先生をはじめ、流通科学大学の南木睦彦助教授、国立歴史民俗博物館研究生の福田美和氏に指導を受け、種実の水洗選別を行っている。1mm～0.25mmメッシュのフルイによる土壌の水洗選別→実体顕微鏡による種実の採取→初歩的な同定作業と分類、の行程はすべて短期間のトレーニングを受けた作業員さんによって進めている。

今年度は、8世紀初頭前後に掘削された溝S D7035の堆積物の水洗選別を行っている。現在有用植物としてはイネ・ヒエ・アワ・アサ・アブラナ科・ベニバナ・ナス属・メロン仲間・サルナシ・ニワトコなどが見ついている。アサの出土は、屋代遺跡群出土木簡の内5点に記載が見られる「布」や、『延喜式』に信濃国の中男作物として記載されている「麻子」（アサノミ）との関係で注目される。また、溝周辺の環境を考える材料としては、水域や湿地に生息するイトトリゲモ・オモダカ・スゲ属・カヤツリグサ属・ホタルイ・コナギ、水域から離れた種類では、エノコログサ・タデ属・ヒユ属・アカザ属・ナデシコ科などが確認できた。こうした雑草類のあり方は、人間による開発と無関係ではなく、今後の検討課題の一つである。



第4図 南木先生から種実選別方法の指導を受ける

水辺の祭祀遺構群：今年度の成果の第二点目は、日本考古学協会の秋の大会において資料報告を行った「水辺の祭祀」の変遷についてである。この中で、屋代遺跡群⑥区の祭祀関連遺構には、(1)湧水点から木樋・水門などを利用し、上澄みを流す「導水型」施設が5世紀後半から設置され、場所を移しながらも8世紀初頭前後まで続くこと。(2)一方、湧水点そのものを掘削し、石製模造品・玉類・ト占骨などが伴う「湧水坑型」施設が、7世紀後半にはじまり8世紀前半まで続くこと。(3)さらに、7世紀後半には斎串・人形・馬形などの木製祭祀具が水辺や流路中に多量に廃棄されはじめ、8世紀前半に隆盛を極め9世紀まで認められること、が明らかとなった。このように、さまざまな祭祀施設や祭祀具が隣接した地点で確認でき、さらに消長の違いを明らかにできた点は、古墳時代から奈良・平安時代の祭祀のあり方を考える上で、貴重な資料となろう。

古代の土器編年案の作成：『古代編』刊行に向けて、遺構ごとのデータ化を進めており、それと平行して編年案の作成を行っている。『分冊』の時代区分は、考古資料の変化とともに環境の変化を基準としているため、9世紀末の大規模な洪水砂層より下層に遺構が存在する7世紀から9世紀が『古代編』の対象となる。

7世紀から8世紀前半までは、木簡が出土した溝の資料を中心に土器編年を組んだ。7世紀初頭から中頃までは資料的にやや不足するものの、7世紀後半から8世紀前半にかけては資料が豊富で、しかも基準資料となる遺構が洪水砂によってバックされているため、層位を根拠とした編年が可能となっている。この層位的な出土状況と、古墳時代的な土師器や須恵器の食膳具が、歴史時代的な須恵器の食膳具に取って代わられていくあり方を中心に編年の時代軸を設定した。さらに紀年銘木簡も出土しており、実年代についても一定の見解が提起できそうである。

8世紀中頃～9世紀後半までは回転糸切りの須恵器杯Aの形態変化と、食膳具に占める須恵器、黒色土器、土師器の重量比の変化により編年を組んだ。ヘラキリの須恵器杯Aはなかなか形態変化がつかめないものの、糸切り須恵器杯Aは明確な変化がつかめている。具体的には内面の底径を計測しその変化を追い、焼成と胎土の変化も加味して明確な時間軸が設定できた。さらに9世紀後半に見られる洪水砂の堆積状況により、住居跡の覆土のパターン化ができ、9世紀後半のより細かな分析を可能にしている。須恵器、黒色土器、土師器の重量比による変化については、松本平の編年と数量的な違いはあるものの基本的には同じ流れになっている。さらに9世紀代については善光寺平特有の器種がいくつか確認でき、他地方との比較の中で善光寺平の地方色がある程度明らかになりそうである。

今後の課題としては、資料的に不足している部分を他の遺跡の資料で補いながら、他地域の状況とも比較してより明瞭な編年案にしていくことである。『中・近世編』の内、10世紀～12世紀初頭の編年作りも平行して進めている。

屋代遺跡群・更埴条里遺跡は、調査範囲の広大さと時代が多岐にわたっていることから、作業が順調に進んでいる部門とまったく手をつけられない部門の差が生じている。今後、全体をまとめるにあたって調整をつけて行く必要性を痛感している。

10 金井城跡・砂原遺跡ほか(北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書1・整理作業)

担 当 者：白田武正 宇賀神誠司

佐久地区における北陸新幹線関係の発掘調査は、平成4年から8年にかけて行い、軽井沢町内(県・県西南部)・御代田町内(池尻・小田井城南部台地)・佐久市内(唄坂・金井城・中金井・栗毛坂・下蟹沢・長土呂・常田居屋敷・前田)・浅科村内(砂原・中平田中島・土合)の計15遺跡(総面積約8万㎡)を調査した。

整理作業は平成7年度から本格的に着手し、遺物量の多い砂原・中平田中島遺跡を中心に進め、今年度は遺物実測を継続しながらトレース作業に移行し、遺物の写真撮影も行った。金井城跡については、石臼や内耳土器などの遺物整理を終了し、遺構図の点検と修正を済ませトレース作業の下準備を行った。報告書は平成9年度の刊行を予定している。

金井城跡は、昭和63年から平成元年にかけて、新幹線用地を挟む小田井工業団地の造成工事に伴い約8万㎡を佐久市教育委員会が発掘調査し、平成3年に調査報告書が刊行されている。今回、新幹線用地の調査を実施したことにより、主郭と二郭の一部を除いて城跡のほぼ全域に調査が及んだことになった。このため、当センターの報告に際しては調査結果の事実記載のみでなく、佐久市の調査成果を踏まえながらも改めて金井城を評価することを基本方針とし、佐久市分の調査担当者を交えて検討会を開催した。

その結果、遺構に関しては竖穴と掘立柱の各建物跡について規模・構造・配置・重複関係などから各郭毎の共通点と相違点を導き出し、郭単位に時期差・階層差・機能差がどうあるのか検証することが課題となった。この点、時期差については、建物跡の分析から三郭→二郭→北郭の順に新しくなる様相が認められ、郭使用の変遷を追うことが可能である。また、集(配)石土坑については、遺構が空白で道路跡と推定される箇所に沿い、居住単位に配置されている傾向が見られることから、その性格に迫る手がかりが得られた。

遺物に関しては、調査方法に制約を受けるものの城跡全体の分布状況を把握し、特に土器・陶磁器類については遺物組成の様相を明らかにするため、口縁部計測法を導入して数量的に計測することを試みる予定である。

砂原遺跡は、縄文・古墳・平安の各時代を個別に整理している。縄文時代については思いのほか中期中葉の土器群がまとまっており、とりわけ焼町土器の出土量が多いことが判明した。破片が主体ながらも、貴重な資料が提示できることだろう。古墳時代は、かつて前期前半の集落跡に伊勢湾沿岸域に酷似する土器群が豊富に伴うことを取り上げたが、遺物整理が進行する中、後期後半の集落跡にも畿内産暗文土師器類が数多く含まれていることが明らかになった。佐久平の中核域から大きく外れた場所にもかかわらず、なぜ社会の変動期を迎える度に外来勢力がここを重視したのか、目下地理的側面から答えを模索している。

平安時代のムラと農地を流没させた洪水砂については、9世紀第4四半期にもたらされたことが確実となり、また田面の状態から田ごしらえの季節に起きた災害と考えられるので、現在ではこれを「仁和の洪水」と判断し、その前提の基にさまざまな検討を押し進めている。

担当者：柳澤 亮

対象遺跡及び主な遺構・遺物を下に記す。詳細は『年報』9～12を参照して頂きたい。

上田市国分寺周辺遺跡群・・・縄文時代の遺物。弥生時代後期、古墳時代～平安時代の集落跡。

〃 上田城跡・・・・・・・・上田城跡崖下の砂層・砂礫層部分にあたり、遺構・遺物なし。

〃 弥勒堂遺跡・・・・・・・・平安時代の集落跡。平安時代～中世の土墳墓。

〃 風呂川古墳・・・・・・・・古墳時代中期古墳(方墳)1基の周溝跡と土師器類。

坂城町開畝遺跡・・・・・・・・奈良時代末の集落跡と中世土坑。

発掘調査は平成4～7年度にかけて実施した。それらの本格的な整理作業は平成7年度から始まり、報告書刊行は平成9年度の子定である。

今年度は、出土遺物の分類・登録・実測と図面の整理・作成といった基礎作業を中心に行った。また、各種分析委託や、講師による遺跡周辺の環境に関する指導を受けた。

現在把握できる点を、報告書刊行に向けての課題として幾つか挙げたい。

遺跡の環境 国分寺周辺遺跡群は上田市域南東部にあり、千曲川右岸にみられる最下位段丘の上田面IIに立地する。遺跡土層内の植物化石分析によると、調査深部(地表下-270cm)から遺構検出面下位層前(-100cm)までは流水性の珪藻化石の検出が主体であるものの、遺構面直下の黒褐色土層ではヨシ属の植物珪酸体が見られる。さらに、遺物包含層(同-70cm)ではそのヨシ属が減少している。この結果と層相や遺構・遺物から鑑みて、遺跡の立地する段丘面の離水時期は縄文時代中期後葉以前とされ、明確な集落としての土地利用の展開は弥生時代後期以降という所見が得られている。今後は遺跡の消滅に関わる平安時代以後の河川の氾濫層(砂礫層)と千曲川や神川との関連などの地学分野からの研究や、歴史的環境の把握を進めたい。

(地学指導：日本地質学会会員 山岸猪久馬氏、自然科学分析：(株)パリノ・サーヴェイ)

鍛冶業の様相 製錬業に関わる遺構・遺物は皆無であるが、鍛冶業に関しては少なからず検出されている。国分寺周辺遺跡群では古墳時代後期の住居跡から、当該期の土師器高杯脚部からの転用羽口が検出され興味深い。また弥勒堂遺跡では平安時代の鍛冶業専用の竪穴遺構が確認



第5回地学巡検指導(丸子町より上田方面を望む)

されている。その規模470×400cmの竪穴内床面に鍛冶炉を1基以上設け、重なり合うピット内からは鉄滓類や鉄塊系遺物・羽口などが多量に検出された。それら遺物の化学分析によると本址は鉄素材を精錬する段階から製品を作り出す段階までの鍛冶業全般を継続的に行っていた遺構であることが明らかになっている。報告書では詳細な化学分析結果と考古学的所見を併せて、各遺跡内における鍛冶業の様相を明らかにしたい。

(遺物化学分析：(株)川鉄テクノロジーサーチ)

12 更埴条里遺跡・屋代遺跡群（北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書3・整理作業）

担 当 者：寺内貴美子

更埴条里遺跡・屋代遺跡群は、更埴市屋代ほかの千曲川右岸の後背湿地・自然堤防上に立地する。北陸新幹線は両遺跡の西端を通るため、試掘調査を含め平成5・6年度に本線に関わる用地の発掘調査を行った。遺物洗浄・写真整理など一部整理作業は平成5・6年度中に終了している。本格的な整理作業は平成7年度から開始し、両遺跡の遺物の注記・接合・実測を中心に作業を進めた。

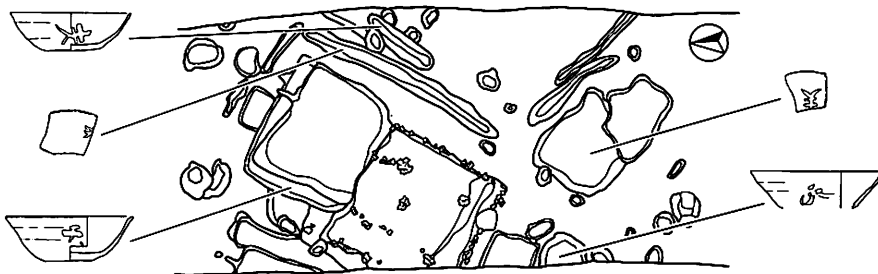
本年度は昨年度から継続の遺物実測を終了、土器の復元・写真撮影を行った。鉄製品については、保存処理を県立歴史館に委託している。現在は平成9年度報告書刊行を目指し図版作成・原稿執筆等を中心に進めている。なお、本年度に調査した関係道路用地の一部で出土した遺物の注記・接合等も行なった。

更埴条里遺跡・屋代遺跡群6区は奈良・平安時代、屋代遺跡群2区は弥生～古墳時代が中心になる。

更埴条里遺跡3・4・5区は調査区によって時間幅が若干異なるが、8～12世紀にかけての集落である。時期不明の畑跡や中世の井戸跡等に壊されている竪穴住居跡もあり、居住域としての土地利用だけではないが、長期にわたってこの場所で生活が営まれている。検出された遺構・遺物は8～9世紀代のものが大半を占める。10世紀代の住居跡も何軒か検出しており、遺物も坏を主体にまとまって出土している。該期の良好な資料となろう。

屋代遺跡群6区では発掘調査時に土手状遺構、奈良三彩、緑釉などが検出され、有力者の存在が考えられた。奈良三彩は小破片が3片出土し、口縁部を含む破片1片がかろうじて実測できた。緑釉も破片で80余点出土したが、接合資料が少なく、実測可能は数点しかなかった。

また、整理作業により墨書土器が破片を含めて50余点に増えた。朱墨で書かれたものも2点ある。半数近くは判別不能だが、文字判別可能なものが20余点、土器の底部に丸を描いたものも数点あった。これらは、礎石建物跡周辺から比較的多く出土しており、奈良三彩・緑釉も同様の傾向を示している。判別できた文字は「吉」「太」など数種類であるが、「夫」あるいは「天」と読めるものが半数以上を占める。転用硯なども何点か出土しており、文字を使用する人を予想させ、有力者の存在を傍証する1つとなりそうである。



第6図 屋代遺跡6-C区 墨書土器出土状況(1:400)

13 篠ノ井遺跡群・築地遺跡ほか（北陸新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書4・整理作業）

担 当 者：田中正治郎・両角英敏

篠ノ井遺跡群 篠ノ井遺跡群は長野市南端、千曲川に接する付近から、篠ノ井みこと川地区にかけて広がっており、千曲川の氾濫原内に立地している。

当センターでは北陸新幹線建設に伴い、平成5年度から7年度にかけて発掘調査を実施し、円形周溝墓群をはじめ、弥生時代から中世にわたる多数の遺構を検出した。そして今年度より本格的な整理作業を開始した。

現在は遺物の実測がほぼ終了した段階であり、遺構と遺物を総合した所見を得る状況ではないが、主として土器の整理を進めるなかで気づいた点について時代ごとに簡単にふれておく。弥生時代 箱清水式単独であり、土器は住居跡、周溝墓等から大量に出土している。しかし破片が多く実測できる個体は意外に少数にとどまった。特に、実測可能な土器のなかで壺の占める割合が低いことが判明した。日常的な器種として甕等とともに壺破片の出土量はかなりの量にのぼるが、壺のような貯蔵具は人々の移動とともに持ち去られてしまうのだろうか。

整理当初、箱清水式の細分も可能ではないかと考えていたが、土器の変異は少なくかなり限定された時間幅の遺跡らしいことがわかり始めている。また、外来系土器も散見されるが、小破片が殆どで、まとまって出土したものはない。

古墳時代 古墳時代の住居跡は50軒以上検出されているが、時期差は少なく、6～7世紀に集中している。全体に、半完形あるいは実測可能な土器が多く、住居廃絶にともなう土器の扱われ方が他の時代とは異なっていることが予想される。また、長胴甕の殆どが胴部に欠損を持っており、廃棄の際の儀礼とも考えられる。

歴史時代 奈良時代から平安時代にかけて80軒近い住居跡が確認されているにもかかわらず、実測可能な遺物は少量である。また土器片の数自体、他の時代に比べて明らかに少ない。大量生産されているはずの坏類でさえ、古墳時代のそれに対してわずかな量にとどまっている。住居廃絶時の土器の扱われ方も考えなければならないが、使用中に破損した土器の処理がどのように行われていたか、非常に興味あるところである。

築地遺跡 築地遺跡は現篠ノ井高校西側に位置し、千曲川氾濫原および犀川扇状地上に立地する。発掘調査は平成5・6年に行われ、平安時代中期～中世の集落を検出した。今年度より整理作業に入り、現在は遺物の実測が終了し、復元に取りかかった段階である。本格的な検討はこれからであるが、現段階で気づいた点は次の通りである。

平安時代 整理作業の結果、小片まで含め、13点の墨書土器と2点の朱墨硯が確認された。これらはすべて、2本の溝に挟まれた南北約40mの範囲から出土している。また、本遺跡では最も古いと思われる9世紀後半の遺物も多くがこの地区から出土したものであった。おそらくこの地区が集落の中心であり、ここを基点として北へ集落域が拡張されていったと考えられる。**中世** 調査区南側の溝から出土した動物骨の中に、人骨が2個体含まれていた。1体は若い男性と考えられる。現在鑑定中であり、結果を待ってこの溝や骨の性格について検討したい。

担当者：上田 真

来年度の刊行にむけて、本年度は遺物の整理、主として土器の接合・復元・実測・写真撮影を行った。対象は、北陸新幹線関連で調査された遺跡のうち長野市内で犀川以北に位置する浅川扇状地遺跡群と三才遺跡である。これらの遺跡の概要については、『年報』10～12を参照されたい。

浅川扇状地遺跡群は広範囲にわたるため、JR信越本線北長野駅を境にして南西部を南西側からW1～W14地区、北東部を南西側からE1～E9地区に区分している。市街化が進んだW地区の方が遺構・遺物の検出が多い。

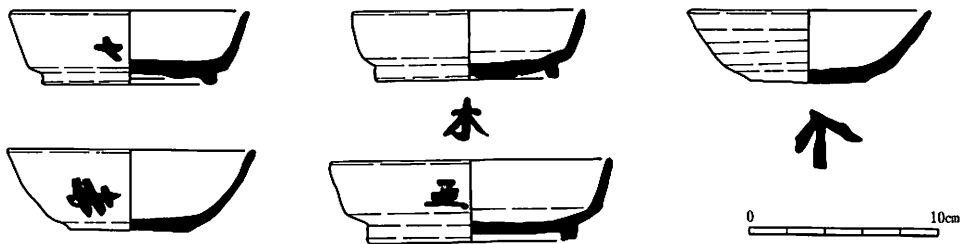
W2B地区ではSB24から弥生時代中期栗林式の壺形土器のほか、土器転用の紡錘車、SB03・04・06・08・09・12・14・15・16・21の各住居跡からは古墳時代前期の土師器壺・甕・鉢やミニチュア土器のほか、土錘などが出土している。W3C地区では、SB07・17などの各住居跡から栗林式の土器、SB14から弥生時代後期箱清水式の壺形土器、SB01・02・10などから古墳時代前期の土師器、SB03・16などから古墳時代中期の土師器・須恵器が出土している。

このように、W2・3地区では弥生時代後期に希薄になるのを除けば、ほぼ弥生時代中期から古墳時代中期まで集落が継続するのに対して、W7・8地区では土坑や遺構外からは前後の時代の遺物が若干出土するものの、住居跡はほぼ古墳時代前期に限られる。W9地区では弥生時代後期と古墳時代中期が中心で平安時代初めの住居跡もあり、W10地区では実測できる土器が出土した住居跡4軒がすべて弥生時代後期、W14地区では弥生時代中期と古墳時代後期の住居跡が散見されるなど、時代による集落の立地の違いが明らかになっている。

また、住居跡ではないが、W9地区の溝SD31からは平安時代初めの墨書土器が多量に出土し、遺跡の性格を考えるうえで重要と思われる。

一方、E1～E9地区およびそれに続く三才遺跡は調査地点のほとんどが畑などの耕作地であり、遺構の良好な残存が期待されたが、古代以前の住居跡の検出が皆無で、同時代の遺物の出土も僅少である。E8・9地区での駒沢城およびその後続施設関連のかわけ・内耳土器・ほうろく・陶磁器など中・近世の遺物の出土が目立っている。

このように浅川扇状地の扇端部という地形上の共通点にもかかわらず、各地区間の相違が明らかになりつつある。今後の遺構整理も併せて、各地区の性格を考えていきたい。



第7図 浅川扇状地遺跡群 W9区SD31出土墨書土器

(2) 長野調査事務所

発掘調査

発掘調査は3遺跡、建設省バイパス関連の貫ノ木遺跡、国営アルプスあづみの公園関連の穂高古墳群と山ノ神遺跡である。貫ノ木遺跡は物件取去の遅れにより残されたわずかの面積を対象とした。穂高古墳群は7年度に仮称小川広場遺跡として試掘調査を実施し、発見された2基の古墳のうち1基（F11号古墳）の記録保存と発掘調査報告書の刊行を行った。山ノ神遺跡は7年度の試掘調査の調査密度が低い地点について、補充的に試掘調査した。

整理作業

対象遺跡は長野・上信越自動車道関連の石川条里遺跡、篠ノ井遺跡群、松原遺跡、榎田遺跡、飯田古屋敷遺跡、玄照寺跡、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、清水山窯跡、池田端窯跡、牛出古窯遺跡、牛出遺跡、対面所遺跡、韭山遺跡、風呂屋遺跡、八号堤遺跡、大谷地遺跡、飛山遺跡、普光田遺跡、七ツ栗遺跡、日向林B遺跡、大平B遺跡、針ノ木遺跡、裏の山遺跡、東裏遺跡、貫ノ木遺跡、大久保南遺跡、上ノ原遺跡、西岡A遺跡、星光山荘遺跡、建設省関連の貫ノ木遺跡、西岡A遺跡、国営アルプスあづみの公園関連の穂高古墳群、山ノ神遺跡である。このうち石川条里遺跡3分冊のうち2冊、篠ノ井遺跡群、飯田古屋敷遺跡、玄照寺跡、がまん淵遺跡、沢田鍋土遺跡、清水山窯跡、池田端窯跡、牛出古窯遺跡、穂高古墳群は遺跡の検討を終え報告書を刊行した。他の遺跡は次年度以降の報告書刊行にむけての整理作業を実施した。



地図4 長野調査事務所関係調査遺跡(1) (1:100,000)

地図5 長野調査事務所関係調査道跡(2) (1:100,000)



1 貫ノ木遺跡 (妙高・野尻バイパス関連)

所在地：上水内郡信濃町大字野尻字貫ノ木1466-9 担当者：大竹憲昭・神林忠克

調査期間：平成8年6月5日～7月12日

調査面積：150㎡

遺跡の立地：丘陵の緩斜面部

時代と時期：先土器時代、縄文時代

検出遺構：先土器時代：遺物集中地点（ブロック）1カ所、礫群1カ所、炭化物集中3カ所
縄文時代：土坑 1基

出土遺物：先土器時代：斧形石器、ナイフ形石器、槍先形尖頭器 縄文時代：早期土器

貫ノ木遺跡は、上信越自動車道と妙高・野尻バイパス建設に伴い平成5年度より昨年度までの3年間に、約48,000㎡を調査してきた。本年度の調査はバイパスへの取り付け道路約150㎡を対象としておこなった結果、先土器時代でも、始良・丹沢火山灰（約25,000年前噴火）降灰以前の石器群が主に出土した。その内容は、隣接する昨年度の調査区とだいたい共通するが、今回の新知見として、調査区北壁面のVb層上面で赤変した土壌を確認した。現地での観察では焼土の可能性が高い。今後の分析によって総合的に判断するところではあるが、焼土だとすれば、今回の一連の調査では初めてのことであり、またこの時期の焼土跡の検出は全国的にみても希少であり、好例を提供することになろう。ただ残念なことに平面的な広がり調査範囲外に延びるために規模・平面形状はとらえられなかった。

2 穂高古墳群 (国営アルプスあづみの公園関連)

所在地：南安曇郡穂高町柏原

調査担当者：百瀬長秀、藤森俊彦

調査期間：平成9年10月1日～10月24日 調査面積：1,000㎡

遺跡の立地：烏川扇状地右岸扇頂 時期：縄文時代、古墳時代、近世

検出遺構：近世の集石遺構1基 主な出土遺物：縄文土器、古墳時代土器、近世陶器

平成8年度の試掘調査で発見された「F11号古墳」の記録保存を実施したが、古墳ではなく近世の集石遺構であることが判明した。農地開発関連で構築されたことが推測される。引き続き「F12号古墳」を試掘調査したが、こちらも古墳ではなく、自然地形の高まりであった。以上の結果を踏まえて、当初計画されていなかった報告書の刊行まで本年度に実施した。

3 山の神遺跡 (国営アルプスあづみの公園関連)

所在地：大町市常盤 調査担当者：百瀬長秀、藤森俊彦 調査面積：450㎡

調査期間：平成9年10月29日～11月7日 遺跡の立地：乳川扇状地扇頂付近

時期：縄文時代 検出遺構：なし 主な出土遺物：縄文土器、フレイク

平成8年度の試掘調査の密度が低い地点について、補充的な試掘調査を実施した。昨年度の試掘調査結果と大きく異なる発見はなかったが、新たに1カ所から縄文土器が出土した。面積はわずかと予想される。

4 石川条里遺跡（長野自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15・整理作業）

担当者：白居直之 市川隆之

石川条里遺跡は長野市塩崎地区に所在し、長野自動車道建設に伴い昭和63年度から平成元年度の2年次にわたり発掘調査された。遺跡は千曲川が形成した後背低地に立地し、一部に小規模な微高地が含まれる。検出された遺構は低地域では弥生・古墳・平安・中世・近世の水田遺構、微高地域では縄文時代の小規模な集落、古墳時代の特殊な遺構群、中世の館跡がある。発掘調査からすでに8年の年月が過ぎたが、平成6年度までは出土した遺物の整理を中心にすすめて、平成7年度からは遺構の整理や報告書刊行へむけて図版の作成を行ない、本年度は最終年度として報告書刊行と収納にむけて整理作業を集中的に進めた。報告書は3分冊を予定し、第1分冊には縄文時代の遺構と遺物、弥生時代～古墳時代の水田と微高地の弥生時代遺構および出土遺物、平安時代の水田遺構と遺物、中世の遺構と遺物、近世の遺構、遺物自然科学分析の一部、第2分冊には微高地の古墳時代遺構・遺物、第3分冊には木質遺物を掲載する構成とした。このうち、第1・3分冊については本年度刊行へむけてトレースや図版の貼り込み、原稿の執筆を行った。また、第2分冊の古墳時代の遺構に関してもトレースや原稿執筆を進行させている。

整理作業にあたってはさまざまな問題もあったものの、その一方で地区ごとの所見や遺物・遺構記録の照合のなかで新たに判明したこともあった。それらの成果についてはここでは詳細に述べることはできないが、発掘調査時には気付かなかったことも多い。これらの成果や課題は報告書で触れられているので、詳細は報告書を参照して頂くことにしたい。

5 篠ノ井遺跡群（長野自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書16・整理作業）

担当者：西山克己 町田勝則

篠ノ井遺跡群の調査は、結果として篠ノ井遺跡群に含めることとなった昭和63年度の石川条里遺跡20-1区の調査以来、平成3年度までの4年間で行われ、報告書の刊行や収納を目的とする基礎的な整理作業は平成3年度から平成8年度の6年間で行われた。その結果、「第1章 調査の概要と遺跡の概観」、「第2章 検出された遺構」、「第3章 出土遺物」、「第4章 成果と課題」、「第5章 結語」からなり「概要・遺構編」、「遺構図版編」、「遺物編」、「遺物図版編」、「成果と課題編」、「別図」からなる5分冊1別図という約2000ページの体裁の報告書を刊行することとなった。

多くの遺構や遺物について、限られた時間や人員の中で、いかに事実記載を中心とする基礎的な情報を掲載できるか試行錯誤した結果として、遺構割付図・遺物図や遺構表・遺物観察表に多くのページをさくこととなった。

事実報告をもとにして、いかに篠ノ井遺跡群を理解していただくかを視点として、導線の役割としての土器編年や集落研究、さらには遺物の個別研究を若干掲載した。また人骨や獣骨の研究については京都大学霊長類研究所の茂原信生先生、国立科学博物館人類研究部の松村博文先生、獨協医科大学第1解剖学教室の桜井秀雄先生より玉稿をいただいて掲載することができた。

内容の詳細については報告書に譲るとして、この9年間の成果を一読していただければ幸いである。

担 当 者：上田典男 青木一男 市川桂子 西嶋洋子 藤森俊彦 増村香子

1. これまでの経過

松原遺跡は、長野市松代町東寺尾に所在する。善光寺平の南東部に位置し、北側を金井山、南側を通称愛宕山によって限られた千曲川右岸の三角形の自然堤防上に立地する。西側を蛭川によって削られているこの一帯は、標高350mほどの平坦な地形である。発掘調査は、上信越自動車道建設に伴い平成元年度から平成3年度にかけて実施された。縄文時代前期中葉から中世に至る7枚の文化層を有し、トンネル坑口にあたる金井山へ続く斜面部からは7世紀の古墳と五輪塔を伴う中世墳墓群が検出されている。中でも平坦部で確認された文化層は、間層を挟み保存状況が良好で、このことが報告書を時代別で分冊にすることを可能にした。整理作業は平成4年度から実施されたが、当センターの年報等で報告してきたように、遺構数・遺物量が膨大で、遺物の注記など基礎的な整理に3年間を要した。並行して、整理作業の方針、報告書の編集・刊行方針を検討し、本遺跡の報告書を時代別に3分冊にし、縄文時代編、古代・中世編、弥生時代・総論編の順で、順次刊行することとなった。平成6年度に縄文編の担当者を置くかたわら、前年度からの基礎作業を継続した。平成7年度には弥生編と木製品整理にも担当者を置き、同時に「石器整理」・「土器復元」・「写真」の別セクションの協力を得て、本格的な整理作業を開始した。なお、保存処理部門に関しては、発掘調査時から脆弱遺物の取り上げや土層転写、または金属製品・木製品などの保存処理並びにそれに関わるレントゲン撮影などの協力を得ており、現在に至っている。

また、上信越自動車道建設を契機とした周辺の道路整備事業や開発に伴って、当センターと同時期に長野市教育委員会により調査が実施された隣接する地区については、すでに報告書が刊行されており、参照されたい。

2. 本年度の整理作業

縄 文 編：土器実測と拓本採拓を中心に作業を進め、報告書の原稿執筆、実測図版・写真図版のレイアウト等を並行して実施した。土器実測は写真実測（業者委託）を大幅に導入し、今年度はそのトレース作業が中心となった。本遺跡の主体となる前期末から中期初頭の土器群については、複数の文様要素を重ねて文様が構成されており、表現方法を含めて難易度が高く、当初見込みの計画とは大幅にズレが生じてしまった。拓本に際しても同様に、文様の凹凸が激しく困難を極めたが、前年度から市販の食品包装用ラップフィルムを用いることでそれを克服し、忠実にかつ鮮明に文様を写し取ることが可能となった。こうした工夫は担当班の作業員によるもので、その発想と実践には敬意を表したい。

別セクションの協力を得て進めている「石器整理」では、器種分類・実測・統計処理等を中心に作業を実施した。実測については、土器実測と同様に写真実測（業者委託）を導入している。「写真」に関しては、「土器復元」と連携をとりながら、レイアウトに基づきながら遺物の写真撮影・遺構写真の焼き付けを実施した。

弥生編：中期後半に関わる土器及び土製品の整理と遺構の整理を中心に作業を実施した。土器については、分類・接合・実測といった一連の作業の中から浮上してきた課題の検討が主で、徐々に成果を挙げつつある。そうした成果の一端を、当センターの【紀要5】に中間報告という形で掲載したので参照されたい。

古代・中世編：古代の竪穴住居址の属性分析と住居址出土の土器の接合及び金属製品の実測を実施。また、木製品の整理については、時代を越えて一括して整理を実施した。写真実測（業者委託）を大幅に導入し、製版と保存処理（PEG含浸）を残し、今年度で整理作業は終了した。

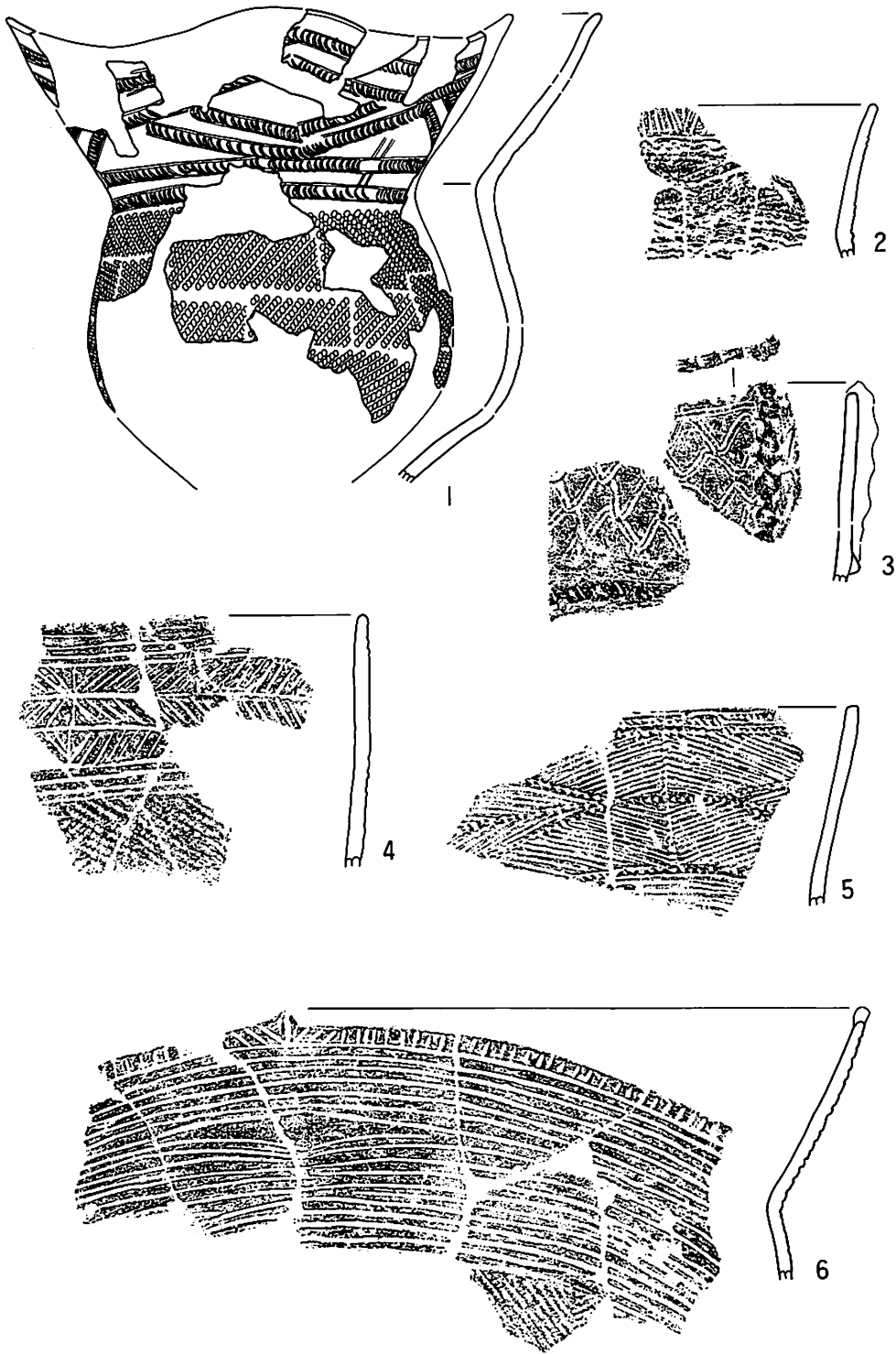
3. 整理で新たに判明してきたこと

ここでは縄文編の整理作業の成果から、幾つかを紹介したい。

本遺跡で主体を占めるのは前期末から中期初頭である。そのうち中期初頭の土器群については、千曲川流域の地域性の強い土器群として「松原土器」と仮称し、梨久保式土器とは趣を異にすることを、先年開催された縄文セミナーの会が主催する第8回縄文セミナーの席上にて、述べた。その後整理が進み、梨久保式土器にみられる沈線文系・縄文系の区別が、「松原土器」では曖昧であることが明らかになってきており、文様・器形のみならず土器の構成要素にも差異が認められ、ゆえに、梨久保式土器からの分離・独立を考えるようになった。当時に比べ、周辺遺跡での資料も若干増えてきており、それらを含め、報告書でまとめられればと考えている。

一方、前期中葉に属する有尾式土器の分類・拓本作業を進めていく中でも、本遺跡出土の土器群が、これまで理解されてきた土器型式の内容とは、文様モチーフ、施文具、施文技法といった点で若干異なった部分を持っていることが明らかになってきた。同時に、文様及び文様構成から類推される周辺地域からの影響などについても、広域編年を検討する上で良好な資料が抽出されている（第8図-2、3）。これらの資料の一部は、贅田明氏によって「前期中葉の諸様相」と題する縄文セミナーの会主催の第10回縄文セミナーで報告されている。1990年代になって県内でもようやく良好な資料が蓄積されてきた状況があり、本遺跡資料も含めて、有尾式土器の型式内容について再検討を要する時期が到来したと言えそうである。詳細については来年度刊行予定の報告書に俟つこととして、今回は実測図及び拓影図を幾つか紹介するにとどめたい。

今年度は、「千曲川流域の縄文文化」と題した当センター主催の企画展が実施された。その企画展に際して、器形復元された特徴的な有尾式土器とともに、「連点状刺突文」の施文原体を推定復元し、有尾式土器に特有な文様（粘土板に描出）及び施文具を合わせて展示した。施文原体の復元については、箱清水式土器にみられる櫛描文の施文原体復元で実績のある徳永哲秀氏に依頼した。その結果、箱清水式土器の場合と同様に、「簾状工具」が最も可能性が高いことが明らかとなった。等間隔に並ぶ刺突文については、1本おき、あるいは2本おきに「簾状工具」内で段差（長短の差）をつけることで可能となり、さらに櫛描き沈線による菱形文構成をとるもの（第8図5）については、「簾状工具」の先端部を斜めに揃えることで容易に描出することができる。このように、見掛け上単純に見える文様についても、また、安直に用いられてきた櫛齒状工具という名称から受けるイメージについても、施文原体を推定復元することによって、ある程度具体性をもって資料に取り組むことが可能となった。この点についても詳細は報告書に譲りたい。



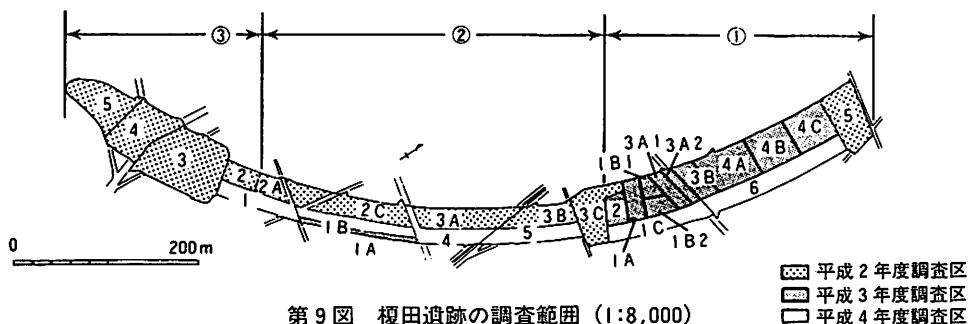
第8図 松原遺跡出土縄文時代前期有尾式期の土器（実測図1:4 拓影図1:3）

7 榎田遺跡（上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書9・整理作業）

担当者：広田和穂 伊藤友久 賛田明 山崎まゆみ

昨年までの作業状況：平成5年 遺物注記、遺構図修正、全体図作成。平成7年 弥生時代中期～中世までの土器接合及び実測のための補強復元、第3号沼出土木製品の整理及び実測、金属製品の保存処理。

本年度の作業：土器実測（弥生時代中期、弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代中期～後期、奈良・平安時代、中世）。第3号沼出土小型木製品の実測とトレース及び図版組。同遺構出土建築部材の実測、トレース。金属製品、骨製品、玉製品の実測とトレース及び図版組。石器類の接合、実測、トレース。遺構の属性分析、修正、2次原図作成。実測終了土器の復元、第3号沼出土木製品の写真撮影。



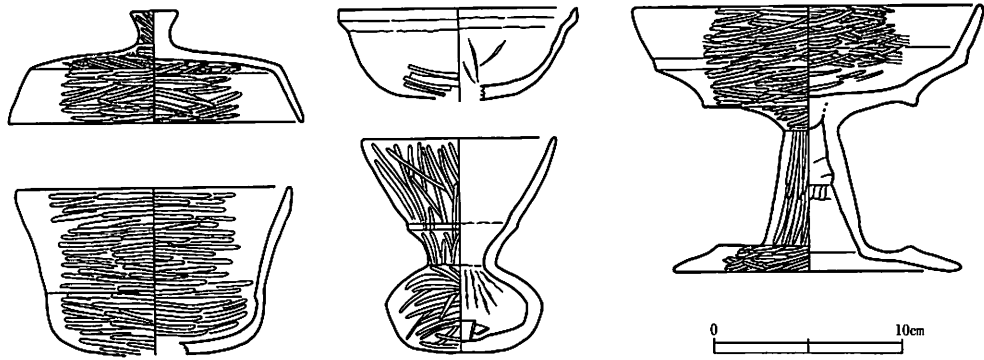
第9図 榎田遺跡の調査範囲 (1:8,000)

中間報告：榎田遺跡における昨年度までの整理は、遺物の接合、実測、トレース、図版組といった基礎的作業が大部分を占めており、その整理過程の中で、従来不鮮明であった各時期の様相、検討課題などが浮上し始めている。以下時代ごとに紹介してゆきたい。

弥生時代中期：本時期の生活域は、遺跡のほぼ中央部②-3-A、②-4地区と南部の③地区において確認されている。特に②-4地区には約40軒の住居跡が存在し、その中には石器の製作工房と思われる住居跡が何軒か発見されている。ここでは閃緑岩・ハンレイ岩製の磨製石斧の未製品や、原石、台石、剥片などが確認されているものの、完成品の磨製石斧がほとんど存在しないため、近隣の集落に石斧を供給していた可能性が浮上してきた。その一つとして長野市松代の松原遺跡出土の磨製石斧が本遺跡の磨製石斧と類似している点を明治大学の石川日出志助教授が指摘しており、今後遺跡間における石器の供給関係を検討するのも重要なポイントとなろう。また、1468号住居からは炭化した織物が発見されている。

弥生時代後期～古墳時代前期：弥生時代後期の住居跡は約100軒ほど発見されており、生活域は大きく2地区に分かれる。一つは遺跡の北部①地区全体に広がる地域、もう一つは②地区を中心とした地域であり、両地域とも墓域（円形周溝墓群）を有する。特に弥生時代後期後半になると次第に②地区に生活域が移動し、古墳時代前期になると生活域は②地区中心になる。住居跡も10数軒と減少し、その後集落は一旦途絶えるようである。

古墳時代中期～後期：榎田遺跡で新たに集落が展開するのは古墳時代中期後葉になってからで

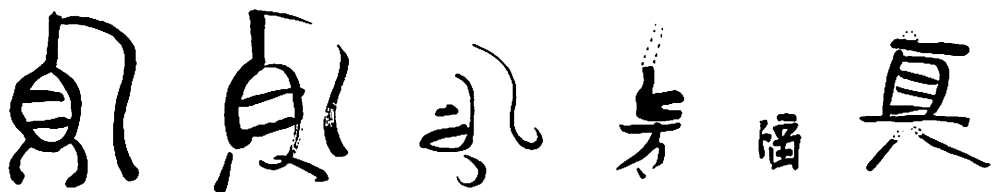


第10図 3号沼出土土器 (1/4)

ある。この時期に遺跡のほぼ中央部に位置する3号沼の両側で集落が成立しており、以後3号沼を挟んで遺跡の両地域に生活域は拡大してゆく。本遺跡ではこの集落が成立する時期に3号沼において大量の遺物(木製品、土器、ミニチュア土器、銅釧、玉製品など)が発見されている。木製品は農具、紡織具、武具、馬具、建築部材などが出土しており、特に農具の中の鋤鋏には、鉄製の刃先が装着された痕跡が確認できる。また、黒漆塗りの弓や、剣の鞘、鎧などが出土している点も注意すべきで、当該期に本遺跡で集落が成立して、開発を進めるに当たり、開発者が何らかの儀式を行った可能性を今後検討する必要がある。本遺跡では6世紀以降、生活域が遺跡全体に広がり、7世紀前半までの間に500軒以上の住居が確認できる。しかし7世紀後半には住居の数は激減しており、この集落衰退の原因も今後検討すべき課題である。

奈良平安時代：本遺跡においては古墳時代後期後半以降、遺構・遺物ともに数が減少しており、奈良時代の生活域も、小規模ながら①地区南部でわずかに確認されるのみである。しかし、9世紀中葉から後半になると同地区に約30軒の住居跡が存在するほか、③地区の47号溝周辺にも生活の痕跡が認められる。特に47号溝からは陰刻花文を施した緑釉陶器や、「貞」と記された墨書土器が数多く発見され、周辺では帯金具や「饒益神寶」なども発見されている。一方①地区南部では墨書土器や特殊遺物は殆ど発見されておらず、両地区の性格の対比も今後の検討課題となろう。

中世：①-3地区を中心に、L字形の溝と多数の掘立柱建物群が確認されている。遺物は青磁片、内耳鍋、かわらけ、すり鉢、火鉢、曲物の一部などが出土しており、時期的には14世紀後半~15世紀代に収まる。



第11図 47号溝出土文字資料 (1/2)

8 清水山窯跡・池田端窯跡ほか(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13・整理作業)

担 当 者：鶴田典昭 中島英子 石原州一

1. 経過と本年度の作業 平成3年度調査の中野市がまん淵遺跡・同沢田鍋土遺跡、平成4年度調査の小布施町飯田古屋敷遺跡・同玄照寺跡・中野市清水山窯跡・同池田端窯跡、平成5年度調査の中野市牛出古窯遺跡の整理作業を行う。上記遺跡の整理作業は平成6年度より行っている。本年度は遺構図版作成と原稿執筆と編集を行い、平成9年3月に報告書を刊行した。

2. 中間報告 高丘丘陵古窯址群の須恵器窯の編年を提示するなどの成果があったが、詳しくは本報告書を参照いただきたい。

9 牛出遺跡・風呂屋遺跡ほか(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書14・整理作業)

担 当 者：鶴田典昭 中島英子 石原州一

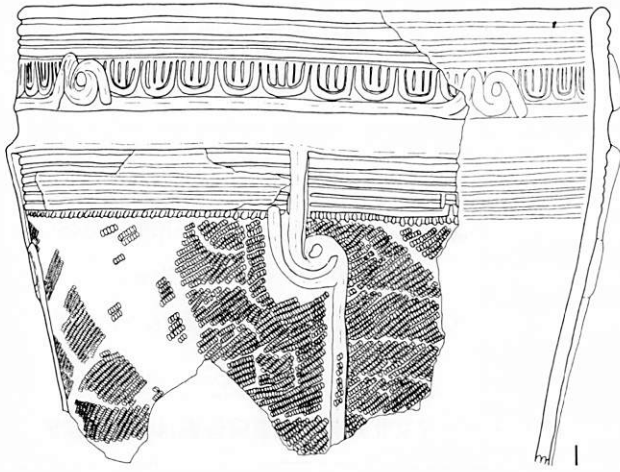
1. 経 過 平成6・7年度調査の中野市牛出遺跡、平成6年度調査の豊田村葦山遺跡・同飛山遺跡・同大谷地遺跡・同八号堤遺跡・同風呂屋遺跡、平成7年度調査の豊田村対面所遺跡の本格的な整理作業を開始する。平成9年度に報告書刊行の予定である。

2. 本年度の作業 上記7遺跡の出土遺物の接合・復元・実測・トレース、遺構図版の作成、原稿執筆を行う。他に、金属器の保存処理、土器の胎土分析を実施した。

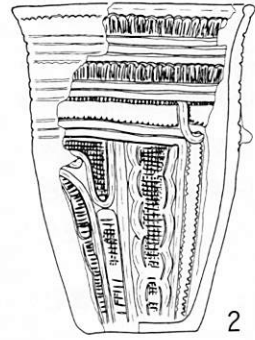
3. 中間報告

遺跡数が多いためここでは、出土遺物の最も多かった風呂屋遺跡の縄文時代中期の土器について述べたい。土器は、ほとんどが破片でありしかも全体の器形を復元できうるようなものは極めて少なかった。そのため、土器に描かれた文様を中心に分類を行った(第12図)。大きな枠組みで分類した場合、まず縄文時代中期初頭の関東地方から中部高地にかけての土器に類似する一群が見られる。次に、もっとも出土量の多い、いわゆる「深沢タイプ」と言われる土器(飯山市深沢遺跡出土)に極めて近い一群(第12図1)がある。深沢遺跡では幾つかの時期に細分化されているが、本遺跡出土土器には、大きな時期差は認められないものと思われる。また、この深沢タイプに大きな影響を与えたと考えられる、北陸の「新崎式土器」に極めて類似した土器(第12図2)が出土しているが、この地域で模倣され作られたものと思われる。これに混じっていわゆる「後沖式土器」の一群(第12図3)なども見られ、各地域の影響の混在する多様性に富む内容となっている。これらの出土土器の多様性が該期の北信の縄文文化の時間的な変遷を示しているのか、または多様な文化圏の影響が並存した地域文化の姿を示しているのか、という課題が残されている。また、30点にのぼる土偶が出土している。これらの土偶も出土土器と同様に深沢遺跡の土偶との類似性が強く、北陸地方との文化的なつながりを予想させる。

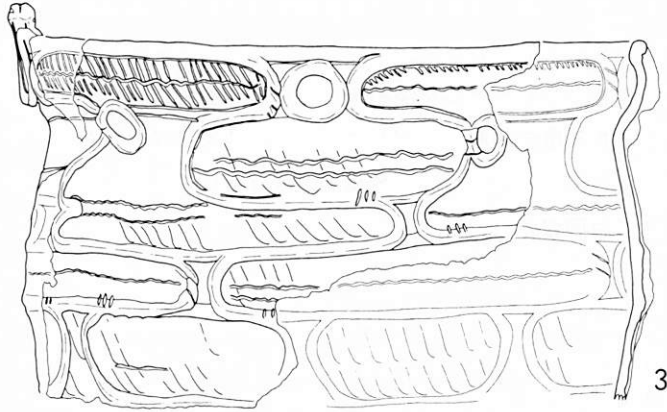
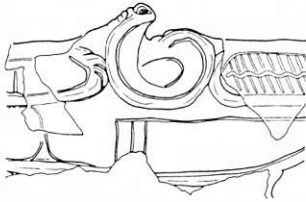
この他に、北信地方に近年発見例が増えた多量の五輪塔を伴う中世墳墓群(対面所遺跡)、古墳時代前期・平安時代の集落址(牛出遺跡)などの整理作業を行った。



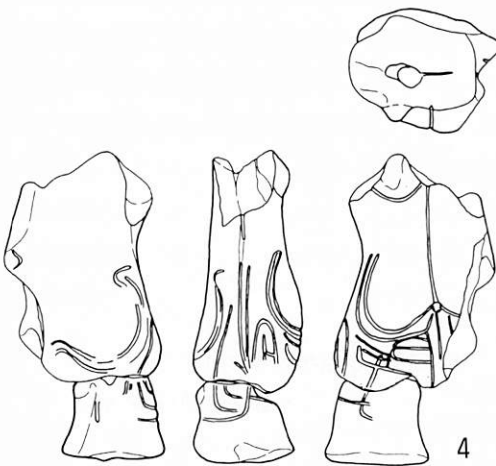
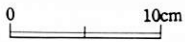
1



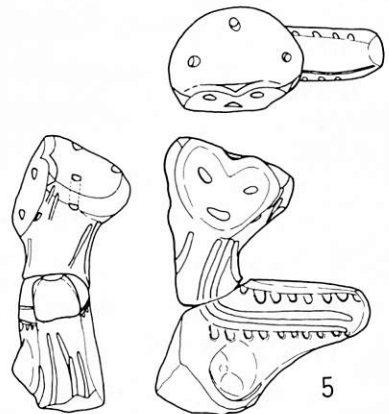
2



3



4



5



第12図 風呂屋遺跡出土遺物

日向林B遺跡・貫ノ木遺跡ほか

(上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15・16および
妙高・野尻バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書・整理作業)

担 当 者：大竹憲昭 神林忠克 谷 和隆 柳沢佑三

平成5年度から平成7年度までの3カ年に上信越自動車道および妙高・野尻バイパス建設に伴い発掘調査が行われた。なかでも上水内郡信濃町野尻湖周辺は、遺跡が密集しており、12遺跡を調査した。その調査の成果は第1表に示したとおりである。先土器時代の遺構と遺物が主体をなし、70,000点を超える石器出土数の9割以上が先土器時代の所産である。12遺跡中先土器時代の遺物が発見されなかった遺跡は3遺跡であった。

昨年度までに中野調査事務所において、発掘調査および冬季の基礎的整理を終え、本年度より、長野調査事務所篠ノ井整理棟に作業場所を移し、報告書刊行に向け本格的整理作業を開始した。本年度の作業内容の概略を示す。

- (1)石器器種判別：石器70,000点のすべてについて、約20の観察項目を設定し、器種名、石材名、遺存度、属性観察、計測等を行った。通年作業。
- (2)礫群整理：貫ノ木遺跡では、約150基の礫群を発掘調査した。礫総数は約12,000点、総重量5tにおよぶ。貫ノ木遺跡は1m前後の厚さをもつローム層のなかに文化層が複数確認される遺跡で、文化層の認定には礫群の分布が有効になる。そのため礫群の認定、グルーピング、礫の接合作業を行った。8カ月作業
- (3)水洗選別微細遺物整理：発掘時に先土器時代の遺物が発見された各遺跡の包含層の土壌をサンプリング、現場および冬季整理時に水洗選別しておいた微細遺物の分類選別を行った。2カ月整理。

第1表 信濃町内調査遺跡の遺物・遺構一覧

| 調査原因 | 遺跡名 | 調査対象面積 | 実質調査延面積 | 石器(点) | 土器(箱) | 礫(点) | ブロック | 礫群・配石 | 住居跡 | 土坑 | 集石 | 炉跡 | 建物跡 | 柵列 | 土器集中 |
|------|------|---------|---------|--------|-------|--------|------|-------|-----|-----|----|----|-----|----|------|
| 高速道 | 普光田 | 1,000 | 1,000 | 10 | 1 | | | | | | | | | | |
| 高速道 | 七ツ栗 | 4,900 | 5,300 | 738 | 50 | 1,554 | 5 | 2 | 7 | 27 | 1 | 1 | 1 | 1 | |
| 高速道 | 日向林B | 10,500 | 18,500 | 11,068 | 30 | 6,966 | 30 | | | 116 | 9 | | | | 10 |
| 高速道 | 大平B | 4,000 | 4,000 | 947 | 2 | 183 | 7 | 1 | | | | | | | |
| 高速道 | 針ノ木 | 4,000 | 4,000 | | 10 | | | | 4 | 4 | | 2 | | | |
| 高速道 | 裏の山 | 8,500 | 8,500 | 7,700 | 1 | | 56 | 15 | | | 2 | | | | |
| 高速道 | 東裏 | 44,000 | 44,500 | 7,000 | 50 | 150 | | 3 | 9 | 1 | | 33 | 1 | | 1 |
| 高速道 | 大久保南 | 3,500 | 4,500 | 1,250 | 1 | | 20 | 3 | | 3 | | | | | |
| 高速道 | 上ノ原 | 7,500 | 10,500 | 2,500 | 3 | | 25 | 1 | | 6 | | | | | |
| 高速道 | 貫ノ木 | 41,000 | 56,400 | 28,900 | 3 | 9,700 | 90 | 100 | 1 | 50 | 3 | | | | |
| 高速道 | 西岡A | 16,500 | 20,900 | 3,300 | 1 | 700 | 20 | 30 | | 18 | | | | | |
| 高速道 | 星光山荘 | 4,000 | 5,400 | 3,000 | 3 | | | | 1 | 23 | 15 | | | | |
| バイパス | 貫ノ木 | 7,600 | 6,700 | 5,900 | 8 | 2,300 | 10 | 45 | 1 | 25 | | | | | 10 |
| バイパス | 西岡A | 9,000 | 11,000 | 10 | | 30 | 1 | 1 | | | | | | | |
| | 合計 | 166,000 | 201,200 | 72,323 | 163 | 21,583 | 264 | 201 | 23 | 273 | 30 | 36 | 2 | 1 | 21 |

[註] 上記の数値は平成9年2月現在の中間集計で、以後の整理で変更がある。

(4)土器整理：貫ノ木遺跡・針ノ木遺跡・七ツ栗遺跡の整理を行った。10カ月整理

(5)石器実測：器種判別と並行しながら随時行う一方で、外部委託もおこなった。

(6)科学分析委託：黒耀石産地同定分析・脂肪酸分析・放射性炭素年代測定を行った。

本格的な整理作業に入り、現在までに判明した成果と課題のうち先土器時代のことについて時期ごとに整理して紹介する。

(1)石斧を伴う石器群

AT(始良・丹沢火山灰)降灰以前の石器文化である。多量の遺物が発見されたことから発掘調査時から話題になった資料である。当該期の石器群の指標となる石斧は全国でも現在までに300点以上にのぼるが、その半数近くの約130点が今回の調査で発掘された。その数字が示すとおり、当該期の石器群を研究する上で欠かすことのできない基準資料となるといえよう。なかでも日向林B遺跡と貫ノ木遺跡の2遺跡の理解が重要となってこよう。この2遺跡は対照的なあり方を示す。日向林B遺跡では直径約20mの環状ブロック群が検出され、1時期に残された大規模な先土器時代のムラであったと推定されるのに対し、貫ノ木遺跡は、小規模なキャンプ地が累積的に残された遺跡と理解される。この二者のあり方は約30,000年前の先土器時代の居住形態の基本をなすものと考えられるが、一連の発掘調査でとらえられた例は今までになく、今後この2者を比較検討しながら、整理報告をすることは、全国的にもはじめての当該期の具体的な遺跡構造のモデルを提示することとなる。

(2)ナイフ形石器を伴う石器群

少なくとも3種類の石器群が存在する。第1に、前述した石斧を伴う石器群と共伴するナイフ形石器である。この時期には台形様石器とよばれる剥片石器が主体をなしているが、剥片素材の2種類の石器の製作技術構造を探ることは、ナイフ形石器の起源を理解する上で重要となってくる。豊富な資料が出土している貫ノ木遺跡・大久保南遺跡の整理がカギとなってこよう。第2に、ナイフ形石器が石器組成の主体となる石器群である。信濃町は西日本に分布の中心をもつ国府系、関東地方に分布の中心をもつ茂呂系、東北日本に分布の中心をもつ杉久保系のそれぞれのナイフ形石器が出土することで注目されていたが、今回の調査では、その資料数を大幅に増加させたうえに、九州地方に数多く出土する剥片尖頭器や形式的に酷似するナイフ形石器が東裏遺跡などで発見された。まるで石器の博物館にでもいるような錯覚におちいる状況であるが、今後、それぞれの系統がどのようにかかわってひとつの地域に存在しているのかを詳細に整理検討していく必要がある。第3には後述する槍先形尖頭器と共伴する石器群である。ナイフ形石器の終焉を考える上で重要となってくるが、先に記したさまざまな系統のどのナイフ形石器がこれにかかわってくるのかも非常に興味深い。

(3)槍先形尖頭器を伴う石器群

従来、槍先形尖頭器を多量に出土するのは県内でも和田峠・霧ヶ峰周辺の黒耀石原産地を中心とした地域に限定されており、北信地方から日本海地方には断片的にしか検出されなかった。貫ノ木遺跡や西岡A遺跡の黒耀石製の槍先形尖頭器は尖頭器文化の波及を考える上で重要な資料となってこよう。

II 普及・公開活動の概要

1 企画展

平成8年11月23日(土)～同年12月15日(日)の20日間、長野県立歴史館企画展示室において、『平成8年度(助)長野県埋蔵文化財センター企画展 千曲川流域の縄文文化』を開催した。

昨年度までは、速報展として、当該年度に発掘調査をおこなった遺跡の出土遺物を中心とした展示会を行ってきたが、本年度は大きな発掘調査がなかったため、整理作業中の遺跡の成果を公開する目的で実施された。

今回の企画展では、平成元年度(1989年)～平成7年度(1995年)にかけて上信越自動車道等建設に伴う発掘調査を行った縄文時代の11遺跡、約200点の遺物を展示した。その内容は以下のとおりである。

星光山荘遺跡(信濃町)：草創期土器(隆起線文)・石器

貫ノ木遺跡・東裏遺跡(信濃町)：早期土器(表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文)

松原遺跡(長野市)・前期土器(有尾式)・石器

風呂屋遺跡(豊田村)：中期中頭土器(北陸系)・土偶

屋代遺跡群(更埴市)：中期中葉土器(大木系・加曾利E並行期)・獣骨

郷土遺跡(小諸市)：中期中葉～後葉土器(大形深鉢・釣手土器)・土偶

岩下遺跡・三田原遺跡群(小諸市)：後期土器・石製品

春山B遺跡(長野市)・中原遺跡(東部町)・晩期土器・土偶

県内の縄文時代といえば、とかく南信の八ヶ岳西南麓が脚光を浴びることが多かったが、今回の展示で千曲川流域の東・北信にも発達した縄文文化があったことを確認することとなった。

「縄文土器は縁遠い存在と思っていたが、住んでいる間近の地下数m下に、大量の土器や石器が埋もれていたとは驚きだ。」などの入場者の声を耳にするなど好評であった。年末が近づいてはいたが、期間中約3,500人の入場者を集めた。



第13図 企画展開催のようす

なお、この企画展のテーマに沿うかたちで長野県立歴史館職員にも協力を求め、内部検討会をもち、千曲川流域の縄文文化に対する理解を深めた。時間的制約があり、十分ではなかったが、今後の報告書の作成や成果の一般公開に役立つものであった。

2 指導・研究会・学習会

| 期 日 | 講 師 | | 指 導 内 容 ほ か |
|--------------------|--------------------------------|---------------------------|---------------------|
| 8・5・14 | 日本地質学会 | 山岸猪久馬氏 | 石器石材・地質について |
| 8・6・24~26 | 京都大学霊長類研究所 | 茂原信生教授 | 屋代遺跡出土骨について |
| 8・7・18~19 | 国立歴史民族博物館 東京大学史料編纂所 東京大学 | 平川南教授 山口英男助手 鐘江宏之助手 | 屋代遺跡出土木簡について |
| 8・7・19 | 流通科学大学 | 南木陸彦助教授 | 屋代遺跡出土種実について |
| 8・7・19 10・21~22 | 国立歴史民俗博物館 考古学研究者 〃 | 辻誠一郎助教授 辻本崇夫氏 松田隆二氏 | 屋代遺跡・更埴条里遺跡の古環境について |
| 8・9・17 | 国立歴史民俗博物館 | 福田美和研究生 | 屋代遺跡出土種実について |
| 8・9・17 | 明治大学 | 安蒜政雄教授 | 先土器時代石器群について |
| 8・9・20、9・2・24 | 東京大学 | 小泉好延助手 | ガラス玉の分析について |
| 8・9・30~10・1 | 飯田市教育委員会 | 山下誠一学芸員 | 松原遺跡の弥生土器について |
| 8・10・21 | 東京都立大学 | 山田昌久助教授 | 屋代遺跡出土木器について |
| 8・10・23~24 | 石川県文化財保存協会 | 田嶋明人次長 | 弥生土器の研究方法について |
| 8・11・8 | 国立歴史民俗博物館 | 平川南教授 | 屋代遺跡出土木簡について |
| 8・12・13 | 八千穂村誌編纂委員会 | 興水太伸氏 | 石器石材について |
| 9・1・24 | 柳原小学校 | 豊田義幸教諭 | 国分寺遺跡群の遺構について |
| 9・1・24~26 | 明治大学 | 石川日出志助教授 | 松原遺跡の整理方法について |
| 9・1・31 | 梓川中学校 御代田町教育委員会 | 寺島俊郎教諭 小山岳夫学芸員 | 金井城跡の遺構・遺物について |
| 9・3・6~7 | 京都大学 | 金田章裕教授 | 条里区画について |
| 9・3・13~14 | 考古学研究者 | 竹岡俊樹氏 | 先土器時代石器群について |

3 刊行物

- 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書15―石川条里遺跡」第1・第3分冊
- 「中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16―篠ノ井遺跡群」
- 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書13―飯田古屋敷遺跡・玄照寺跡・がまん淵遺跡・沢田鍋土遺跡・清水山窯跡・池田端窯跡・牛出古窯遺跡」
- 「上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書22―清水製鉄遺跡・大穴遺跡」
- 「国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書1―穂高古墳群」
- 「長野県埋蔵文化財センター年報13」
- 「長野県埋蔵文化財センター紀要5」

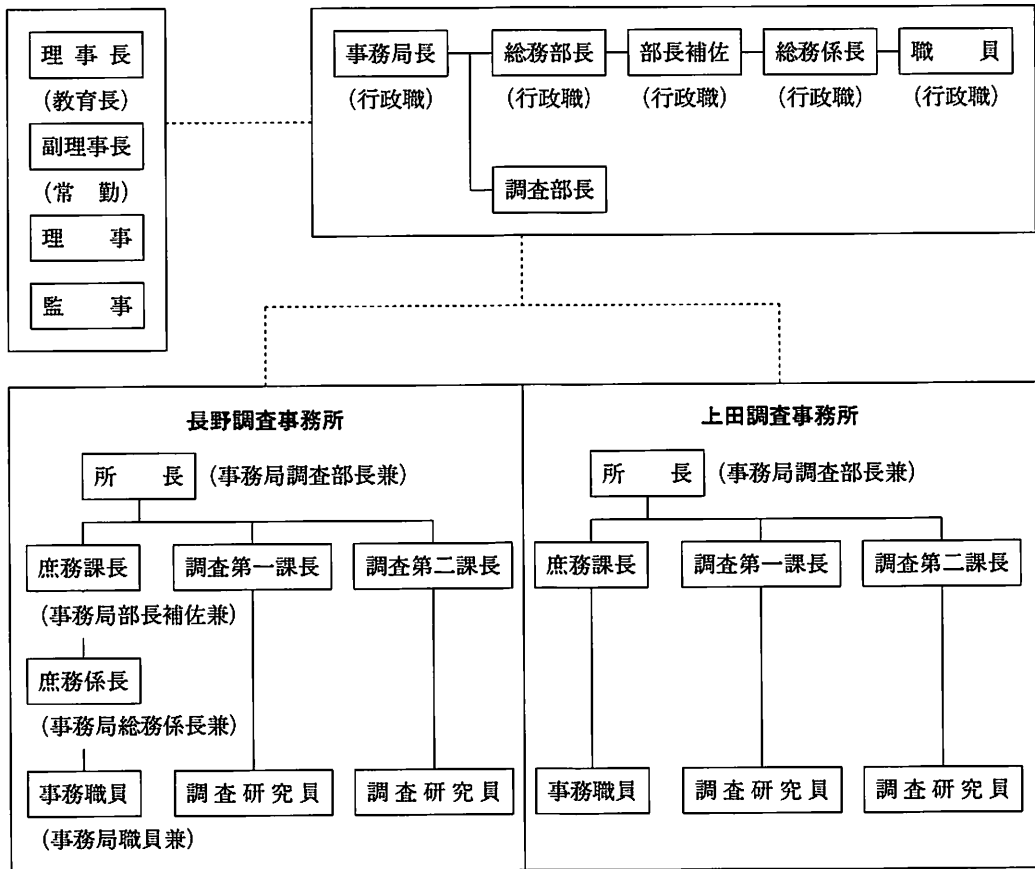
III 機構・事業の概要

1 機構

(1) 組織

| | | | |
|-------|--|--|---|
| [理事会] | 理事長（県教育長） 副理事長（常勤） 理事（県企画局長） 理事（県高速道局長） 理事（県新幹線局長） | 理事（県文化財保護課長） 理事（県文化振興事業団事務局長） 理事（市町村長代表） 理事（市町村教育長代表） | 理事（県考古学会長） 理事（考古学研究者代表） 監事（県会計局会計課長） 監事（県教委総務課長） |
|-------|--|--|---|

（財）長野県埋蔵文化財センター組織図



(2) 事務局所在地

本部・事務局 更埴市屋代清水260-6

長野調査事務所 更埴市屋代清水260-6

上田調査事務所 上田市下塩尻936-3

2 事業

(1) 理事会および会計監査

理事会

- 第32回理事会 平成8年5月30日 会場 長野市 ホテル国際21
 - 第1号議案 平成7年度事業報告について
 - 第2号議案 平成7年度決算報告について
 - 第3号議案 監事の委嘱について
- 第33回理事会 平成9年3月24日 会場 長野市 ホテル信濃路
 - 第1号議案 平成9年度事業計画(案)について
 - 第2号議案 平成9年度収支予算(案)について
 - 第3号議案 平成8年度収支補正予算(案)について

会計監査

平成8年5月29日実施 平成7年度事業報告書および収支決算書について

(2) 調査事業

北陸新幹線にかかる埋蔵文化財の発掘調査—長野県教育委員会からの委託。国道野尻バイパスにかかる埋蔵文化財発掘調査—建設省関東地方建設局からの委託。国営アルプスあづみの公園にかかる埋蔵文化財発掘調査—建設省関東地方建設局からの委託。蓼科ダムにかかる埋蔵文化財の発掘調査—諏訪建設事務所からの委託。調査課職員の派遣。

ア 調査遺跡および調査面積

- 北陸新幹線関係 佐久市・更埴市各地域内 2 遺跡327㎡
- 国道野尻バイパス関係 信濃町地域内 1 遺跡200㎡
- 国営アルプスあづみの公園関係 穂高町・大町市各地域内 2 遺跡1,450㎡
- 蓼科ダム関係 茅野市内 2 遺跡37,500㎡

イ 整理事業

- 長野自動車道関係 長野市の 2 遺跡の整理事業
- 上信越自動車道関係 佐久市・小諸市・東部町・上田市・坂城町・更埴市・長野市・小布施町・中野市・豊田村・信濃町内、73遺跡の整理事業
- 北陸新幹線関係 御代田町・佐久市・浅科村・上田市・更埴市・長野市内、19遺跡の整理事業

ウ 職員派遣

- 飯田市、原村、兵庫県より要請を受け、埋蔵文化財発掘調査関係の業務のため、調査課職員を1名ずつ派遣

(3) 事業費

長野自動車道関係：147,568千円、 上信越自動車道関係：661,503千円、 北陸新幹線関係：135,397千円、 国道バイパス関係：26,767千円、 国営公園関係：9,639千円、 蓼科ダム関係：32,556千円、 側道関係：7,201千円、

(4) 普及活動 (33ページ参照)

(5) 職員研修

ア 講師招聘および来所による指導・講習会等 (34ページ参照)

イ 奈良国立文化財研究所関係

| 期 日 | 日 数 | 課 程 | 参 加 者 |
|---------------|-----|------------|-------|
| 8・12・17～12・20 | 4 | 荘園遺跡調査課程 | 河西克造 |
| 9・1・23～2・6 | 11 | 信仰関連遺跡調査課程 | 桜井秀雄 |

ウ 海外研修

| 期 日 | 内 容 | 参加者 |
|----------------------|--|--------------------|
| 8・12・2 ～ 12・13 | 我が国の古代文化の源流となった中国古代文化遺跡の研究 ①遺跡・博物館等の見学 旅順博物館、遼寧省博物館、新樂遺址博物館、鄭家窪子遺址博物館、查海遺址博物館、故宮博物館、中国歴史博物館、周口店遺址博物館ほか ②研究機関等 中国社会科学院考古研究所ほか | 町田勝則 若林卓 川崎保 |

エ その他の学会関係研究会・研修会

| 期 日 | 発 表 者 | 内 容 |
|-----------|----------|--|
| 8・6・2 | 水沢教子 | 「更埴市屋代遺跡群の木簡」長野県考古学会8年度総会 |
| 8・7・6～7 | 寺内隆夫 | 「屋代・更埴条里遺跡の自然科学分析結果から見た善光寺平南部の古環境について」国立歴史民俗博物館基幹研究会 |
| 8・7・20～21 | 水沢教子 | 「縄文土器の製作地をめぐる諸課題」国立歴史民俗博物館特定研究会 |
| 8・10・13 | 水沢教子 | 「大木式土器と火焰型土器—胎土から考えられること」十日町市火焰フォーラム |
| 8・11・17 | 小林秀夫 | 「長野県内の横穴式石室の様相」長野県考古学会8年度大会 |
| 9・2・1～2 | 賛田明 | 「前期中葉の諸様相—長野県」第10回縄文セミナー |
| 9・2・1～2 | 谷和隆、大竹憲昭 | 「野尻湖周辺の先土器時代遺跡について」第9回長野県旧石器文化研究交流会 |
| 9・2・6 | 徳永哲秀 | 「土器復元の技法」平成8年度市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会 |
| 期 日 | 参 加 者 | 内 容 |
| 8・11・9～10 | 宮島義和、川崎保 | 日本考古学協会1996年度大会シンポジウム「水辺の祭祀」 |
| 8・12・5～6 | 西山克己 | 研究集会「律令国家の地方末端支配機構をめぐる」 |
| 8・12・7～8 | 水沢教子 | 第18回木簡学会総会・研究集会 |
| 9・1・18～19 | 上田典男ほか、 | 長野県考古学会縄文部会シンポジウム「押型文と沈線文」 |
| 9・2・8～9 | 寺内隆夫 | 第23回古代城柵官衙遺跡検討会 |
| 9・3・1～2 | 宇賀神誠司 | 第41回埋蔵文化財研究集会「古墳時代から古代における地域社会」 |

そのほか、各種学会・研究会・シンポジウムなどへの参加多数

オ 県外博物館・埋文センター・遺跡等視察及び資料調査

| 期 日 | 視 察 ・ 調 査 他 | 参 加 者 |
|------------------------------|----------------------------|----------|
| 8・11・21～22 | 国立歴史民俗博物館、横浜市立博物館 | 石原州一 |
| 8・12・4～6 | 和歌山県立博物館、紀三井寺、大阪府立弥生博物館ほか | 伊藤友久 |
| 9・2・26～31 | 飛鳥資料館、奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館ほか | 鳥羽英継 |
| 9・3・5～7 | 三重県埋蔵文化財センター、榎原考古学研究所、天理大学 | 広田和穂、賛田明 |
| そのほか、各地の博物館・研究機関などの視察・調査など多数 | | |

カ 全埋文協などへの参加

| 期 日 | 会 議 名 | 開催地 | 参 加 者 |
|------------|---------------------------------|-----|-----------------------|
| 8・6・6～7 | 全国埋文協総会 | 松山市 | 佐久間鉄四郎、青木久、宮沢弘 |
| 8・10・3～4 | 全国埋文協研究会 | 山形市 | 外谷功、田中勝男、小林秀夫 百瀬長秀 |
| 8・10・8～9 | 全国埋文協中部・北陸ブロック コンピューター等研究委員会 | 金沢市 | 上田典男、大竹憲昭 |
| 8・11・14～15 | 関東甲信越静地区 埋蔵文化財担当職員共同研修協議会 | 浜松市 | 鶴田典昭 |
| 8・11・28～29 | 関東甲信越静地区埋蔵文化財担当者会議 | 豊科町 | 広瀬昭弘 |
| 9・2・13～14 | 関越自動車道関係等四県連絡会議 | 新潟市 | 土屋楨、西山克己 |

キ 長野県総合教育センター研修

| 期 日 | 区 分 | 講 座 名 | 参 加 者 |
|-----------|----------------|-----------------|-------|
| 8・9・17～18 | 専門研修II社会・地歴・公民 | 個を育てる社会科 | 相沢秀樹 |
| 8・10・3 | 専門研修II生活科 | 自立を育む生活科の指導 | 相沢秀樹 |
| 8・11・18 | 情報・産業教育研修 教育工学 | 理科シュミレーション | 藤森俊彦 |
| 8・12・3～5 | 専門研修II技術 | 刃物づくりで学ぶ金属加工の基礎 | 柳沢亮 |

ク 県内市町村および関係機関への協力・指導等

| 期 日 | 市町村等 | 協 力 ・ 指 導 内 容 | 協 力 者 |
|-----------|------|-------------------|-----------|
| 8・4・19 | 茅野市 | 家ノ下遺跡出土木製品の整理について | 白居直之 |
| 8・5・13 | 佐久市 | 蛇塚古墳の発掘調査について | 宇賀神誠司 |
| 8・7・11～12 | 新潟県 | 和泉A遺跡出土土器について | 百瀬長秀 |
| 9・1・21 | 真田町 | 四日市遺跡出土土器について | 賛田明 |
| 9・2・12 | 中条村 | 宮遺跡の整備について | 小林秀夫、伊藤友久 |
| 9・2・21 | 山梨県 | 土器復元の新技法について | 徳永哲秀 |

その他5市町村に対して協力した。

ケ 平成8年度市町村埋蔵文化財担当者発掘技術研修会

一長野県教育委員会・長野県立歴史館と共催

| | | | |
|---|-----|---|---------------|
| 1 | 日時 | 平成9年2月6日(木) | 10時30分～15時30分 |
| 2 | 会場 | 長野県立歴史館講堂、実習室、研修室 | |
| 3 | 内容 | 講演 「発掘調査における安全管理」 長野労働基準局主任労働衛生専門官 召田厚幸 実演講習「土器復元の技法」 （財）長野県埋蔵文化財センター調査研究員 徳永哲秀 コース別に実習 | |
| 4 | 参加者 | 152名 | |

コ 資料貸し出し

| 期 間 | 遺 跡 | 貸し出し資料 | 貸 出 先 ・ 目 的 |
|----------------|--------|--------------|---------------------|
| 8・7・20～8・25 | 岩下・郷土他 | 縄文土器・石器・垂飾品他 | 県立歴史館「企画展・縄文人の一生」展示 |
| 8・7・22～9・13 | 松原 | 弥生土器・石器・玉類他 | 上田市立国分寺資料館「特別展」展示 |
| 8・11・1～12・25 | 石川条里 | 石釧 | 丸子町郷土博物館「特別展」展示 |
| 8・11 ～ | 日向林B他 | 台形様石器・石斧・砥石他 | 県立歴史館「常設展示」 |
| | 松原 | 石戈・石剣・人面付土器 | |
| | 榎田他 | 鞍・木製農具他 | |
| | 郷土 | 土鈴・三角柱状土製品 | |
| 8・8・15 | 松原・篠ノ井 | 豎櫛写真・銅釧写真 | 至文堂「日本の美術」掲載 |
| 8・8・23 | 石川条里 | 遺跡写真 | 学習研究社「謎の天皇陵と巨大古墳」掲載 |
| 8・10・8 | 日向林B他 | 遺跡写真・石器写真 | 角川書店「発見の古代史」掲載 |
| そのほか写真等の貸し出し多数 | | | |

サ 同和研修

| 期 日 | 講 師 | 内 容 |
|---------|-------------------------|-------------|
| 8・12・10 | 菲澤久人（長野県教育委員会同和教育課指導主事） | 「人権感覚を問い直す」 |

平成 8 年度役員及び職員

理 事 会

| | | | |
|-------|------------------------|------------------------|--|
| 理 事 長 | 戸田 正明 | | |
| 副理事長 | 佐久間 鉄四郎 | | |
| 理 事 | 伊藤 寛 (県企画局長) | 所 輝雄 (県高速道局長) | 加藤 勝彦 (県北陸新幹線局長、10月31日まで) 高野一也 (同、11月1日から) |
| | 山下 四郎 (文化振興事業団理事・事務局長) | 伊藤 功 (県教委文化財保護課長) | 宮坂 博敏 (更埴市長) |
| | 森 嶋 稔 (県考古学会長、6月3日まで) | 桐原 健 (同、6月18日から) | 滝沢 忠男 (長野市教育長) |
| | 神村 透 (考古学研究者) | | |
| 監 事 | 風間 良一 (県会計局会計課長) | 芹沢 勤 (県教委総務課長、5月31日まで) | 前坂 一雄 (同、6月17日から) |

事 務 局

| | | | |
|---------|-------------------------|---------|-------|
| 事 務 局 長 | 青木 久 | | |
| 総 務 部 長 | 西尾 紀雄 | 調 査 部 長 | 小林 秀夫 |
| 総務部長補佐 | 外谷 功 | | |
| 総 務 係 長 | 田中 勝男 | | |
| 職 員 | 篠原 教雄 (主査) 宮沢 弘 (主事) | | |
| 派 遣 職 員 | 藤原 直人 (長野県教育委員会から兵庫県派遣) | | |

調査事務所

| | 長 野 調 査 事 務 所 | | | | 上 田 調 査 事 務 所 | | |
|-----------|--------------------------|-------|-------|-------|--------------------|-------|--------|
| 所 長 | 小林 秀夫 (兼) | | | | 小林 秀夫 (兼) | | |
| 庶 務 課 長 | 外谷 功 (兼) | | | | 山口 栄一 | | |
| 庶 務 係 長 | 田中 勝男 (兼) | | | | 主事 石坂 裕 (9月30日まで) | | |
| 庶務課職員 | 主査 篠原 教雄 (兼) 主事 宮沢 弘 (兼) | | | | 主任 小岩 一雄 (10月1日から) | | |
| 調 査 課 長 | 百瀬 長秀 土屋 稔 | | | | 白田 武正 広瀬 昭弘 | | |
| 調 査 研 究 員 | 青木 一男 | 石原 州一 | 市川 桂子 | 市川 隆之 | 相澤 秀樹 | 上田 真 | 宇賀 神誠司 |
| | 伊藤 友久 | 上田 典男 | 白居 直之 | 白田 広之 | 河西 克造 | 川崎 保 | 桜井 秀雄 |
| | 大竹 憲昭 | 上沼 由彦 | 神林 忠克 | 澤谷 昌英 | 田中 正治郎 | 田村 彬 | 寺内 貴美子 |
| | 谷 和隆 | 鶴田 典昭 | 徳永 哲秀 | 賛田 明 | 寺内 隆夫 | 鳥羽 英継 | 平出 潤一郎 |
| | 西 嶋 力 | 西山 克巳 | 広田 和穂 | 藤森 俊彦 | 水沢 教子 | 宮島 義和 | 両角 英敏 |
| | 増村 香子 | 町田 勝則 | 柳沢 佑三 | | 柳沢 亮 | 若林 卓 | |
| 調 査 員 | 中島 英子 西嶋 洋子 山崎 まゆみ | | | | | | |

長野県埋蔵文化財センター年報13 1996

発行日 平成9年3月31日

編集発行 (財)長野県埋蔵文化財センター

〒387 更埴市屋代清水260-6

TEL 026-274-3891

印刷 信毎書籍印刷株式会社

〒381 長野市西和田470

TEL 026-243-2105